

# ドナウ通信

No. 54

## 目 次

新年 所感	特命全権大使	松本 和朗	2
新年のご挨拶	日本人会会長	伊藤 和矢	5
随 想			
ブダペスト駐在記	秦 隆司		7
ハンガリーでの子育て事情	小林 律子		9
ありがとう そして さようなら	高嶋 正子		12
ああゴルフ人生	石嶋 弘		14
会社紹介			
タナシン (Europe) K f t		上坂 彰	17
補習校児童作品			
作文 「文化祭」	全学年児童		19
俳 句	小学4年～中学3年児童		28
訃 報			
追悼 マルクス・ジョルジュ (1927-2002)	小沼 通二		31
特集 ノーベル文学賞を読む			
ケルティース・イムレの世界	盛田 常夫		36
『運命の不在』 (要約版)	ケルティース・イムレ		40

## 新年所感

特命全権大使

松本 和朗

あけましておめでとございませう。日本人会の皆様も新しい気分で新年を迎えておられると思います。まずは、本年も日本とハンガリーとの両国関係が引き続き順調に進展しますことを、また、当地日本人会が邦人社会の中核としてさらに発展いたしますことを願っております。とくに、昨年は吉岡直道会長はじめ、商工会、日本人補習校運営委員会の役員の方々には大変ご尽力を頂きましたことを改めてお礼申し上げます。また、伊藤和矢会長はじめ、新しく役員を引き受けて頂きました幹事の皆様には日本人会の発展に向けて引き続きよろしくお願い申し上げます。さて、年末の日本人総会でも申し上げましたが、昨年は何といいまし

ても二国間関係の最大の出来事は、七月に天皇、皇后両陛下のハンガリー公式訪問が実現をみたことです。両陛下は中欧四力国最後の訪問国ハンガリーで四日間滞在され、マードル大統領夫妻をはじめハンガリー側の心からのおもてなしを受け、また邦人社会の皆様の暖かい歓迎を受けながら、この間、大勢の各界の人達にお会いになり、また、高齢者センター、セーチエー二図書館やブタペストやエステルゴム等の名所旧跡等精力的に訪問日程をこなされました。二〇〇〇年に日本を公式訪問されたゲンツ前大統領夫妻とも、メツジエシ首相昼食会や迎賓館で再会を果たされました。

つたハンガリーに対する印象を大きく変える転機ともなり、明るいヨーロッパの夏空に親しみを込めて接するハンガリー人の姿や古都ブタペストやエステルゴムといった見所一杯の、魅力あふれる、かつ、親しみが持てるハンガリーという国を多くの人達が知るきっかけになりました。ハンガリーへの日本からの観光客は、昨年の九・一一テロ事件以降はともかく、ここ数年伸びて来ております。今回のご訪問を契機にハンガリーを訪問する日本人観光客がこれからも増えて行くことを願っております。このように、昨年は、日本とハンガリーの二国間関係では、文字通り歴史的な年となりました。このご訪問の成果を受けて、両国関係がより成熟した新しい段階に入っていくことを私は確信しておりますが、良好な基盤の上にある両国関係をさらに一歩一歩発展させていくことが私どもに課せられたこれからの課題であ

ると思っております。

昨年を振り返って、文化交流面でも例年を上回る多彩な活動を行うことが出来たと思っております。これらの文化行事に私も出来るだけ参加させて頂いたしましたが、申し訳ないと思いつつも、参加できない幾つかの行事もありました。紙面の都合で全ての活動に言及できませんが、両陛下のご訪問前には、四月に当地で発足したハンガリー茶道同好会の記念デモンストレーションをゲンツ前大統領の出席を得て大使館で開催いたしました。また、慶応義塾ワグネル・ソサイエティ・オーケストラ演奏会、関根勝教授の能に関する講演や、根付け展(いずれも三月)、六月の日本映画週間等々数々の催しが企画されました。五月の国際指揮者コンクールでは、松沼俊彦氏が優勝しました。この国際指揮者コンクールは一回目で、小林研一郎、井崎正浩、本名徹二が優勝し、日本人と

しては四人目です。

ご訪問後にも、九月に、日本オペレッタ協会のオペレッタ公演、欧州日本語シンポジウム、沖縄民族舞踊があり、また、八月には阿部シゲルモダンアート展や四力国共同デブレッツチエン美術展(富山芸術文化協会の小泉博さんのイニシヤテブによるもの)、一月には芥川賞受賞作家、玄侑宗久先生や、二月には戸谷美苗先生(「日本の100冊翻訳の会」事務局長)の講演会等の各種行事を実施、後援、関与することとなりました。文化無償では、三月にロッケンバウアー文化遺産大臣(当時)とブタペスト歴史博物館への視聴覚機材供与、また、一二月に、両陛下のご訪問されたセーチェニ図書館に対する録音機材供与の交換公文をゲルゲイ文化遺産大臣との間で署名いたしました。

当地で二度目の日本オペレッタ協会によるオペレッタ公演は、同協会

の創立二五周年の年にハンガリーを訪問し、前回(一九九八年)と同様、ハンガリーの作曲家レハールの「微笑みの国」をブタペスト、セゲド、ペーチの各地で日本語で歌唱し、好評を博しました。初日の公演にあたり、マードル大統領よりの特別のメッセージも頂きましたが、今回の公演は、長年オペレッタ普及に従事されてこられた寺崎裕則会長の努力の集大成といえるでしょう。また、日本ハンガリー友好協会の後藤田兄妹が長年支援された「レジェハーザ」プロ・ムジカ」合唱団の訪日一周年記念コンサートにも招待され、チャバイ市長と一緒に鑑賞することができました。合唱団がハンガリーの歌のみならず、日本の民謡等を日本語で立派に歌唱する姿に感嘆いたしました。その際、薨去された高円宮殿下が何度もお聞き頂いたということ、この日は特別のレクエームが歌われました。一月には小林研

一郎指揮者が二年ぶりに当地で指揮を振られ、ピアニストの小林亜矢乃さんと共演し、熱狂的な観客の反応を通じて、小林研一郎指揮者が当地で最も愛されている日本人であることを改めて確認することができました。

今年の行事としては、龍村光峯の織物展や、藤田喬平のガラス工芸展といった企画を検討中ではありますが、文化活動は草の根レベルを含む民間のイニシアティブによるものを中心となりますだけに、いろんなところで多様な催しが企画、実施されることを願っています。

両国関係のあり方について、ハンガリーの人達は日本を戦略的パートナーと見なしているという人が少なくありません。両国がどこまで戦略的パートナーといえるか議論のあるところですが、ハンガリーとの二国間関係が、政治、経済、文化、学術、各方面で年々着実に深まっています。

とは事実であります。ハンガリー側ではメツジェシ新政権発足後、チツラグ経済運輸大臣が昨年一月閣僚としてはじめて訪日し、平沼経済産業大臣と会談しました。また、一月にはコヴァーチ情報通信大臣の訪日計画が計画されています。さらに、ネーメト農林大臣や、ラーズロー財務大臣も春には日本を訪問したいとの意向と聞いていますし、メツジェシ首相も今年にはアジアを訪問することを検討中といわれています。こうしたハイレベルの要人交流に加えて、各レベルでの多様な相互往来が今年も期待されます。

経済関係は、現在、約百社近くの社の日本関係企業が当国で活躍し、ハンガリーに対する日本の直接投資は累計で一億ドルを超え、中東欧に対する日本の直接投資の五割を占めてきました。在留邦人も現在約九二九人となり、ブタペストの日本人補習校は現在生徒数七一名となっております。

います。昨年は、サンヨー・ハンガリー、ダイアモンド電機、スタンレー電気等の開所式や、記念行事に参加し、また、知的フォーラムの中小企業シンポジウムや「Euro」の逆見本市などの活動が活発に行われました。技術協力分野でも我が国は、環境、生産性等の専門家や、青年協力隊を派遣したほか、医療器材等の機材供与を実施し、また、中東欧環境センターへの支援を継続しています。このように、二国間関係では、中欧諸国の中でハンガリーが最も緊密ですが、これからも中欧諸国の中でハンガリーが日本との関係において先導役を果たすことを願っています。

ハンガリーは、昨年一二月のコペンハーゲンでの「首脳会議」で他の加盟候補国とともに、二〇〇四年の「加盟達成を確実なもの」としました。メツジェシ首相は、「ハンガリーは千年前にキリスト教を受け入れ、アイデンティティを守った。今日このア

イデンティを強める為には欧州的価値を受け入れなければならぬ。巴加盟により、ハンガリー一千年の夢が実現する。」と語っています。しかし、日本とハンガリーの関係は、引き続き従来以上の重みを持って発展していくものと私は確信しています。両国の架け橋の役割を担う数多くの人達の努力で順調に発展してきた二国間関係が、両陛下のご訪問の成果を受けて本年さらなる飛躍の年となりますことを願っています。

## 新年のご挨拶

日本人会会長

伊藤 和矢

ハンガリー日本人会の皆様、新年明けましておめでとうございます。ご家族と一緒に当地で新年を迎えられた方々、旅行先で、或いは一時帰国された日本でも、皆様さまざまな場所で新年を迎えられたものと思います。そして皆様それぞれが「一年の計は元日にあり」ということで、本年の目標、心中期するもの等を定められたことと思います。二〇〇三年が皆様方にとりまして、希望に満ちたものとなりますことを心より祈念致します。

ハンガリー日本人会も会員総数五百名を数え、商工部に属する企業数も増加しております。私と致しましては、甚だ荷の重い大役を仰せつかった訳ですが、昨年一二月の日本

人会総会で一緒に選任されました理事の方々の力もお借りしてなんとかこの大役を果たしていきたくと考えています。

昨今の日本の情勢を見ますと、いまだ不良債権問題は解決せず、失業問題、デフレ不況など、深刻な状況が続いていると申さざるを得ません。俗に失われた十年と言われる一九九〇年代以降に、国際競争力番付、国債の格付けなど、大きくランクを落とし、海外で生活する私たちもいたいこの先日本はどうなるのだろうかと思うことが続いています。

翻ってハンガリーの状況を見ますと、二〇〇四年五月のEU加盟が本決まりとなったことは、当国で仕事をし、生活をする私達にとりましては、いろいろな面でメリットがあるものと思われまます。勿論、人、物、金の移動が原則自由になることから、競争の激化、物価や賃金の上昇など、種々問題も起こるとは思いますが、

現在の会員皆様の多くの方々が、この歴史的な瞬間を当地で迎えらるることになると思います。

欧州統合がここまで進むには当然長い道のりがあった訳ですが、「欧州を舞台にした大戦を二度と繰り返さないためには、独仏を中核とする統合しかない」という基本的な考え方が一九五一年に既にあつたこととです。その事実を考え合わせれば、東西冷戦下にあつた旧共産圏諸国も一緒にEUに加盟する二〇〇四年は、単に「ビッグバン」と呼ばれる一カ国の加盟以上に大きな意味を持つものと思います。

ハンガリー日本人会も吉岡前会長の大変なご努力により、正式に法人としての登録が完了しました。また、「法人化」に合わせた規約の改定も昨年の日本人会総会で決議されています。この結果、本年より正式に「ハンガリー日本人会」の看板を掲げる事務所を国会議事堂の近くに設ける

ことができました。会員皆様のお知恵を拝借して、気軽に立ち寄れるような事務所にしていきたいと考えております。皆様のアイデアなりご助言なりを、是非ともよろしくお願い致します。

昨年の前会長の新年のご挨拶にもございます通り、「法人化」することで、資金的負担がかなり増えていくことが予想されます。日本人会の運営費用は個人会員及び法人会員よりの年会費によって賄われています。日本人補習校に通う児童の数も増えてきており、「法人化」に伴う経費増と相まって、将来的に資金ショートを来たす可能性が全くないとは申せません。年会費の安易な増額など毛頭考えてはおりませんが、これから一年間の運営を行っていく中で、或いは法人会員企業各社にご相談をしなければならぬ局面が出てくるかもしれません。勿論、そのような事態にならぬよう、従来以上に経費の

使用には注意を払う所存であります。本年もハンガリー日本人会の活動に積極的にご参加頂きますようお願い致します。

## 随想

### ブダペスト駐在記

秦隆司

年も明ければ、もうすぐブダペスト駐在五年にならんとする故か、一区切りの意味からか駐在記の執筆の依頼があり、思い付くまま、とりとめのないことを書くこととします。

八〇年に会社へ入り、ハンガリー赴任までは食料畑、特に砂糖・澱粉の事業を行っている本部に所属しておりました。従い、日本における時は、そんなことから、豪州の砂糖を韓国へ売ったり、タイでデンプンの製造会社を設立したり、はたまた、当社の関連会社の砂糖やその他の甘味製品を日本国内のコカコーラや、ビール会社に販売したり、といった仕事ばかりして参りました。海外取引と

いえば、御分かりの通り、殆どが所謂「環太平洋国」詰まり米国、東南アジア、豪州といったところで、これらの国とお仕事をされた方は、よく御分かりの通り、彼らは仕事のパートナーとしては、ベクトル自体が気持ちよいくらい日本へ向いており、交渉も細かいことでは苦労するも、大体はお互いの共同の価値観、仕事観で、解決可能なことが多く、同じ土俵で仕事をするなどの安心感があります。また、仕事もやった分だけは実績が上がり、仕事が順調に流れておれば、さて、自分は *golf course* の *fair way* を自信気に歩いているが如しで、気持ちの良いものでした。

ハンガリー中をスバルを運転して駆け巡り、時には本店からその専門家の出張を仰ぎ、実際に具現化を試みるも、成功したのは数えるほどで、あとは全て上手くいかず。理由は様々なことが考えられますが、ハンガリー特有とも思える、仕事を革新して新たに創造する喜びを解ろうとしない。国または企業に成功談が、伝統・文化として残っておらず、あるのは、上手くいくはずがないとも思い込んでいるが如くの組織 *DNA*（小生の上司はこれを、永遠の「ハンガリー阪神タイガース説」としてお持ちであります。）組織力に対しての不信感。つまり、組織行動力のシナジー的な効果を理解しえない。そして、何より全ての経済 *エニ* が小さすぎることで、ありません。

でも、逆に考えれば、環太平洋諸国相手に筆者が一応は成功してきた、同じアプローチをこのハンガリーに

持ち込もうとしたことに、大きな過ちがあるのであり、筆者は「のれんに腕押し」「ぬかに釘」状態の解析をもっとやっておれば、あるいは正解は、裏口からか、または逆さにしてみて切ってみるくらいの大胆さが必要だったのかもしれない。結論は、この国は小麦、トウモロコシなどの主要農産物の自給率は一五〇%以上であり、要は「食うに困らぬ国民」で、極東のどこかの国が、「エネルギー」、食料を輸入せんが為に、夜を徹してまでも自転車を漕いでいるがごとの経済観、仕事観とは全く異なる、価値観を持つておる為でしょう。歴史二百年の多民族国家、米国の経営学者がよく使う様な *agility*, *efficiency*, *moral* といった言葉は、きつとこの国にはもとより存在しなく、そこは小国とは言え歴史深いヨーロッパの一員であるとの強い自負心と、それよりも、もつと人間として大切な *fundamentals* の深さ、幅が違うの

よと、我々に問いかけているとさえ、最近、思えてきます。精神的な豊かさの指数で、適当な解析指数があるとするば、それを合算しての総合GDPでは日本の首都圏、都市圏であくせく働くサラリーマン達より我マジヤール人達はずっと豊かなのかもしれない。

そんな豊かな国ハンガリーをお蔭様で、家族達も多いに *enjoy* して四年余の駐在生活からこの六月に帰国しました。子供達が将来、どんな仕事に就こうとも、その頃には、海外諸国との相互理解、相互乗り入れといったことで海外との *interface* の機会が益々多くなるとでしょう。多感な少年期、青年期をブダペストで、あるいはアメリカンスクールで過ごした、経験が、親馬鹿ながらも、彼らの強固な「人間力」の源泉の一つとなってくれておればと願っておる次第です。

家内も、もともと西洋かぶれの家

庭で育ち、欧州に対してはミーハー的な憧れがあり、彼女自身のことばを借りれば「大好きなヨーロッパ」を、積極的に自分で解析して、のめり込み、どっぷりと漬かっておったとの印象を持っております。補習校の集まり、マルナの会、自分と同じ環境にあった奥様方と何かの弾みで一緒に作ってしまったテニスの練習会（ラブダ）などなど。皆様と貴重な時間を共有出来たことは、大切な思い出として持つておる様です。幸運ならば、近い将来もう一度海外赴任があればと、二人で心密かに思っておる次第です。

最後に、私事ですが、赴任直後の九九年度に補習校運営委員長を拝命し、直ちに商工会で、補習校への寄付を理不尽とも思える金額で、気合いと度胸だけで承認して頂いたこと（今どう考えても経済性の議論からすれば、矛盾ばかりが思い出されます）、ソフトボール大会の商工会監督



を二度も請け負いながら優勝できなかったこと（確か、三菱の野田さんや、江田さんは見事に優勝してお帰りになったと記憶しております？）そして最後にこれを書き出したら終わらないであろう愉快な、我が最愛のテニスフリーク達との、数々「迷」場面とそれに起因する小生につけられた不思議な「あだな」の数々（解任総監督、ハナ啓、負神様、etc.）。

恥ずかしい思い出が、時間の経過とともに、愉快的思い出に変わるの、やはり、ハンガリーという、素晴らしい、大らかな赴任地に恵まれたのでしようか。日本では「失われた一〇年」などといわれてますが、それを横目に、同じ期間EU加盟へ向け拡大均衡を成就したこのハンガリーで過ごせたことを、経済人、社会人としてこの上ない、幸せとっております。

## ハンガリーでの子育て事情

小林 律子

一九九九年春に私はここハンガリーに夫の転勤に伴い赴任してきました。日本では聞きなれない国ハンガリーってどこにあつてどんな国なんだろうと思いつながら当初不安な気持ち一杯でありました。が、先に赴任してました奥さん方の助けがあり生活面で様々な事を教えて頂くにつれ数ヶ月後にはその不安はほとんどなくなつてました。夫婦二人で暮らすには快適で何の問題もない状況だったので。しかし、こんな状況も長く続かなかつたのです。というのも子供ができたからでした。前々から子供は欲しいと思つていたのですが、まさかハンガリーでできるとは思つてなく私達二人にとっては青天の霹靂の出来事でした。当時私達には子供がいなかつたので出産・子育てに

関しては何の知識もありませんでしたので、妊娠した事により「どうしよう」という問題が私達夫婦の間に大きな大きな問題としてのしかつてきました。この「どうしょ」の中にはどこで出産するか？ハンガリーの出産事情は？病院の整備状況は？出産後のケアは？ベビーグッズは？乳児用の食事は？などなどベビーに関する事柄が頭の中を一瞬で駆け巡りました。と、こんなこともありませんがらも少しずつ勉強し、親が医者だったこともあつてか知識もそれなりについてきました。でも出産はやはり第一子だったこともあつてやはり日本にしました。出産後四ヶ月でハンガリーへ戻つてきましたが、その後の子育て事情について私の知る範囲で少し述べたいと思います。

まずハンガリーで真つ先に行った事としては、同じようなベビーをもつた奥さん方と知り合いになることでした。これは日本でも同じだと思

います。ここハンガリーでは日本人が少ないこともあり、一人でも二人でも知り合いがいることは非常に重要な事であります。お互いに情報交換しながら助け合っています。この場として「ベビーの会」があることを教えて頂き、私はすぐさま入会しました。この会のことも含め次に少し述べます。

### ベビーの会

ベビーの会は私にとつては非常にありがたいものでした。ベビーに関する情報を手でできることもさることながら、同じ年代の奥さん方と友達になれたことが非常に嬉しく思っています。又、ここでは帰任される方や子供が大きくなって必要でなくなった衣類・おもちゃ・道具類などを持っている方などからそれらを引き継ぐこともでき、非常に助かっています。情報交換ではどここのスーパには新鮮な魚があるとか、おいし

いパンはどこで売っているとか生活に密着した最新の情報が得られます。

### ベビーシッター

ベビーシッターは日本ではまわりの目もあつて非常に利用しにくいのですが、ここハンガリーではおつぴらに利用できます。これにより自分自身の自由な時間を作ることができ、日頃のストレスを発散することが出来ます。毎日毎日子供の世話を休む間なく行っている母親にとつては、仕事で毎日帰りが遅く、土曜日にも出勤（たまに日曜日まで出勤！）する夫の助けはとても期待などできず、ベビーシッターは天の助けであります。もしこんな状況で日本にいたら発狂してたかもしれません。ただベビーシッターはハンガリー語しか話せないのがたまにキズですが・・・又、夜も割高になります。が利用する事ができ、夫婦二人だけでレストランにオペラ鑑賞に出掛け

たりもできます。

### 小児科ドクター

日本人がよく利用するドクターとして Dr.Salinas Elba del Carmen というスペイン系の女性の先生がいます。この先生はセンテンドレ方面に住んでましてブダ市内からは少し離れてますが、何か子供に関して問題があつたときにはすぐに自宅まで往診に来てくれます。又、結構親日的でありサクランボの季節には先生の自宅の庭にあるサクランボの収穫に招待してくれたりもします。診察は英語なので全く問題ありません。他の病院・診療所では小さな子供を連れて行かなければならないことを考えるとかなり助かります。又、予防接種に関しても BCG・ポリオ・三種混合等必要なものを計画通りに行ってくれます。日本にはなくヨーロッパで必要な予防接種もある事を知りましたが、私は何でもいいから接

種しておけばいいか？と気楽に考え  
全て先生に頼んで実施してもらいま  
した。そのお陰もあつてか息子は未  
だに大きくも小さくも病気をほとん  
どしてません。

### 出産について

日本人がよく利用する病院として  
TELKI PRIVATE HOSPITAL がありま  
す。これは文字通り個人経営の病院  
であり、診察料は通常のハンガリー  
の公的病院に比べるとかなり割高で  
あります。しかし、ドクターは外国  
で医学を修得した優秀な方が多く、  
又医療施設も西欧と遜色ないものが  
設置されております。入院患者用の  
病室に至ってはそこいらの三つ星程  
度はあるホテルがそれ以上と言つて  
も過言ではありません。当然ルーム  
サービス？もあり（何と一階にはレ  
스토랑があるのでそのメニュー  
から選択できるのです。ただハンガ  
リー料理ばかりですが・・・）快適

そのものです。診察も英語であり全  
く問題ありません。ただ欠点として  
は病院のロケーションがブダペスト  
市内ではなく隣村の「EKKER」村にあ  
ることです。ブダペスト市内からは  
往復約三五kmくらいあり途中かなり  
辺鄙なところを通るので本当にこん  
なところに病院があるのか？と思つ  
てしまいます。それと、出産後は通  
常四日で追い出されてしまいます  
（日本では六～七日）。ホテルみたい  
なところなのでもっと長く居たいと  
思うのですが・・・。現在私は第二  
子を身籠つてまして今回はここ  
TELKI 病院で出産をしようと思つて  
ます。定期検診も少し遠いですが夫  
の助けを借りて毎月通つてまして、  
どんな出産体験になるか不安と期待  
で一杯です。

以上いろいろと日本とは環境が異  
なるところでの子育てについて書き  
ましたが、ハンガリーに住んでいる  
母親で出産・子育てに奮闘している

方にとって少しでも参考になれば幸  
いです。

私の息子は「英嗣」と言いますが、  
彼は現在二歳七ヶ月。かなりのやん  
ちゃでいたずら坊主です。本人はハ  
ンガリーでの親の苦勞を何も知らず  
健やかに育つてます。たぶん大き  
なつた頃には全て忘れてしまつてい  
るだろうと思いますが、後にここで  
の楽しかったこと、大変だったこと  
を多く聞かせてやれたらと思つてま  
す。

ありがとう

そして さようなら

高嶋 正子

二〇〇三年一月、とうとう私は日本に帰ることになってしまった。

ハンガリーで暮らした三年十ヶ月、何と幸せな日々だったろう。ここで暮らせたこと、全てに感謝の気持ちで一杯だ。

一九九九年三月、私は高校一年生の末娘を連れて先に赴任していた夫の元にやって来た。すでに長女はアメリカで大学生、長男は日本の高校を卒業したばかりだった。

私は「ここハンガリーで子離れ人生の出発をする」と決めた。

「なーんだハンガリー人ってやさしいじゃない」。初めてラーツ温泉に行った時の感想である。それまでは、何だかハンガリー人って、無愛想で恐そう、と感じていた。ラーツ温泉に行くといつもハンガリー人のやさ

しさに触れられた。ハンガリー語が全く出来なくても、ここでならハンガリー人と交流できた。

おばあさんと背中の中の流しっこをしたり、ホッペにクリームを塗ってもらった。一週間に一度は行っていた。二、三週間行かなかつたりすると、「どうしたの、長い間来なかつたじゃない」と言われたりした（ハンガリー語が出来ないのだから、そう言ってるのだらうなど、との想像なのだ）。今、ラーツ温泉は改装の為に閉鎖している。あのひなびた温泉が良かったのになあ。あそこで働いていたおばあさん達にもう会えないと思うと残念でならない。

そんな訳で、現在はキライ温泉に通っている。この温泉は、晴れた日の昼に行くと、ほんの短い間なのだが、ドーム型の屋根からお日様のひかりが幾すじも差し込んで、それがお湯の上でキラキラ輝いている。幻想的でいい温泉だ。

「寒くても家に閉じこもっていることはないんですよ。暖かい格好をして外に出てごらん下さい。バスの番号がひとつ違うだけでもいろんな景色が見られますから」。この言葉は初めて参加した商工会婦人のランチの会で、隣に座った方からのアドバイスだ。何とありがたいアドバイスだったことだろう。定期券さえ持つていればブダペスト中、ただでどこにも行くことが出来た。

きのうはあの番号に乗ったから、きょうはこの番号に乗ってみようとか。そのうち行先に斜線があるのはブダペスト市郊外、赤字は急行と分かった。私のお気に入りは五六番トラム終点 *Hűvösvölgy* から六三番バスに乗って終点の *Nagykovács* (ナジコヴァーチ)。この小さな八百屋さんで買う卵は生で食べることが出来た。マムート前の黄色いポローンバスに乗って、ジャンベークにもよく行った。

二、三時間あれば、娘が帰って来るまでに、ひとりで小さな旅が出来た。春先には透けるような緑色の葉っぱが見たくて、夏にはひまわりが見たくて、秋には秋色の葉っぱが見たくて、何度行ったことだろう。雪にうもれたあの町も見なかったけれど、バスが動かなくなった時のことを思うと、不安で行けなかった。

雪の日にはヤーノシュ山を歩いたことがあった。真白の中を一時間も歩いていたら私の心の中は真白になれた気がした。なんてことはない。次の日には、ささいなことで夫に腹を立ててしまっているのだけれど。西駅や南駅、Zepstadiion バスターミナルに行って時刻表を見るのも好きだった。行きたい所への夢が広がった。

「私は に行きたい。何時に出ますか？何番のりばですか？ここに書いて下さい」。こうハンガリー語で書かれた紙を窓口で出せば、大抵の

人は笑顔でやさしく対応してくれたし、行きたい所に行けた。イヤな思いは一度もしなかった。三年目には娘はアメリカンターナショナルスクールを卒業し、私の元から去り、更に拘束される時間が少なくなった。それを機に、ハンガリー語の学校に入ったけれど、これは残念なことに落ちこぼれてしまった。授業についていけない子供の辛い気持ちがある

すぐ良く分かった。これも良い経験だった。最後の夏には主人が出張で家にいないのを利用して、一度目はセゲドへ、二度目はジュラに、リユックサククひとつで、行き当たりバッタリのひとり旅に出てみた。列車の窓から景色を見てみると「私は風になる」と感じた。独身時代はひとり旅は淋しくて嫌いだ。食事がおいしくなかった。それがおばさんになつたら淋しくなかったのだ。これにはビックリ。夕食はワインも飲んでおいしく食べれたし、メチャ

クチャなハンガリー語でも人に伝われば楽しいし、何より誰に気を使う事もなく、気を使うのは自分の体調だけ。疲れたらベンチで足を投げ出して休み、歌いたい時には歌うことが出来た。口から出てくる曲は、決まって松山千春だった。

### 巡る巡る季節の中で

#### あなたは何を見つけてるだろう

これから私は確実にあばあさんになっていく。死ぬまでにどれだけの季節が巡っていくだろう。あばあさんになって死ぬまで、ワクワクする気持ちは決して失わない生き方をしたい。ハンガリーを去るに当たり、改めてそう自分に誓う。

## ああゴルフ人生

石嶋 弘

ゴルフと聞くと贅沢なスポーツというイメージが湧くかもしれないが、必ずしもそうではない。小生一六歳でゴルフ場に弟子入りし、二三歳で挫折するまでの七年間、寝ても起きてもゴルフのみの人生を送った。丁稚奉公のような生活であったのだが、そのなかで特に忘れられない体験を振り返ってみたい。

### 平屋

小生の奉公先は九州福岡県飯塚市筑豊、炭鉱の町である。寮は平屋で、窓の向こうにはぼた山が見える。東京の出身である小生は、九州と聞いて気候が暖かいと思い、特に冬物の服も持たずに訪れたのだが大間違い。九州でも日本海側ではこれほど寒い日が続くのだと驚いた。もしかすると、かつて炭鉱の男たちが住んでい

たという隙間だらけの平屋が原因だったのかもしれない。ガラス張りの扉を締め切ってもなお部屋の中に風が吹いているように思えたのは、気のせいだったのだろうか。あれほど寒い思いをしたのは初めてだった。寒いときに風呂に入るのにはかなりの勇気がいるものだ。とにかく着ているものは脱ぎたくない。もちろん一旦湯船につかると気持ちよくなるのだが、風呂から出てしばらくすると前にも増して寒くなる。ついに我慢できなくなり親から電気カーペットを送ってもらってからはナメクジのように床に張り付いていた。

ナメクジというと、梅雨の時期になると必ず出てくる。畳の端にきらめくものは彼らの形跡である。それを辿っていくとそこに必ず彼らはいるので。小ささまざまなのだが、大きなものほど触ってみたくなるのは小生だけだろうか。しかし、あれほどぬるぬるしたものを残しながら這

っているのに、なかなか消えてくならないのはなんとも不思議だ。

### 球拾い

研修生は練習するものと思っていたのは甘かった。一日は掃除に始まり掃除に終わる。いつまで経ってもクラブを握らせてもらえない。半年ほど経って掃除にかけては誰にも負けないという気持ちで伝わったのか、ようやく一人前の弟子としてもらえるようになった。ところが一人前の弟子というのはまだ練習をさせてくれるということではなく、実はプロの練習を手伝うことができるということなのだ。

プロというのは一日に三、七球ほど打つのだが、小生の役割はまず球拾い。球拾いというのは、プロが打ち終わってから集めるのではなく、球を打っているときにその落ち場所について一つひとつ拾うことを言うのである。ゴルフをやっ

る人は良くわかると思うが、逆光では打ちづらい。したがって、プロは必ず太陽を背にして練習をする。しかし、球を拾う方は逆にやりづらい。一日中練習するので雨の日以外は必ず球と太陽が一致するときがくる。太陽を手のひらでさえぎりながら飛んでくる球を追うのだが、太陽に隠れるときはそうはいかない。そんな時は飛んでくる音を聞きながらどの辺りに落ちてくるのか判断する。

プロの球はスピニングがかかっているので、地面に落ちる前の五メートルぐらいから音が聞こえてくる。そこから地面に落ちるまでにかかる時間はおそらく一秒ぐらいだろうか。その間にはたして自分に向かっているのかどうか判断しなければならぬ。しかし判断が遅いと自分に当たると痛いのだが、落ちてくるときはそれほど勢いがないのか、実際にはそれほど大したことはない。プロはそ

れを知っているのか、特に気にせず  
に次々と打ってくる。

球を拾うときはすぐに雑巾で拭いて籠に入れるのだが、真冬になると二分ほどで雑巾が凍ってしまう。そんなときは近くの池に走っていき、池に張っている氷を叩き割り、雑巾を絞る。手袋をしているとそれ自体が凍ってしまうので素手でするしかない。こんなことを何日もやっていると、そのうち手があかぎれになってくる。あかぎれが進み、ひび割れがどんどん深くなってきたときに初めて気づいたのだが、肉というのは赤くなく、実は白い。一旦あかぎれになると春がくるまで治らない。

### やくざな大先生

小生が所属していたゴルフ場には支配人の上にさらに総支配人なる人物がいた。この総支配人とは、かつては「玄海の鬼」と恐れられ、日本プロで優勝し、当時九州プロゴルフ

協会の会長を務めていた藤井義将氏である。研修生は彼を先生と呼び、限りなく崇拜していた。先生のためなら命をも捨てる、と感じていたのは小生だけではなかったであろう。ちなみに先生はゴルフ場の経営にはほとんど関わることはない。好きなときに来て練習し、好きなときに帰っていくのである。これでなぜ総支配人なのかはいまだにわからない。

先生は日焼けのために色黒で、言葉数が少ない。研修生は皆先生の目つきで次の仕事を判断する。とにかくこの目つきが鋭いので、先生が朝ゴルフ場に到着するとそれまでの雰囲気は一変し、ぴりぴりしてくる。ソファーに座っている先生が靴箱のほうをちらりと見ただけで、一人の研修生がシューズを先生の足元に持っていく、そこで待機する。先生がそれまで履いていた靴を脱ぎ始めると、それは持っていった靴が気に入ったことを意味し、足元で待機して

いた研修生は早速靴紐をとき、靴べらを差し出す。研修生の間に安堵の雰囲気は漂う。なぜなら、もし先生に差し出した靴に砂粒でもついているものなら、投げ返されるかも知れないからだ。幸い小生がそのような経験をしたのは一度だけであった。

先生の車は白塗りのベンツ。車は常に掃除されていなければならぬ。研修生は二日おき程度の間隔で手洗する。車体はもとよりタイヤのホイール、灰皿、座席の下なども完璧でなければならぬ。先生が帰宅するときはすべての研修生が整列し、車が走り出すときに深く頭を下げる。頭を下げているときの表情は皆非常に幸せそうだ。なにしろこれでようやくその日は先生がいなくなるのだ。

### 未来の総理大臣

ゴルフ場の持ち主は麻生家。麻生家というのはその昔九州に存在していた麻生財閥の後継である。現職の

国会議員である麻生太郎氏は大のゴルフ好きで、よくキャディーをしたものだ。彼は吉田茂の孫にあたり、鈴木善幸氏の娘が妻である。当時は「未来の総理大臣」というピラをよく受け取ったものだ。選挙の時期になるとゴルフ場の職員が総出で応援し、道端で万歳する。小生も皆から投票しろと言われていたのだが、残念ながら選挙権がまだなかった。

この麻生氏、非常に面白い人である。ゴルフが終わり、皆で食事をしている時に色々な話をしてくれる。相手がゴルフの研修生と知ってか、政治の話は一切しない。個人的なことが中心なので具体的な内容については言えないが、とにかく研修生は皆げらげら笑っていたものだ。

麻生氏の関係で、鈴木善幸氏がゴルフ場を訪れたことがある。当時はすでに総理大臣ではなかったのだが、黒服の男たちがあれほどいるのは見たことがなかった。ゴルフ場の隅か

ら隅まで検査していた。

鈴木善幸氏が現れてしばらくすると練習が始まった。我らの大先生が鈴木善幸氏にレッスンをした。先生が手取り足取り教えるのを見たのはそれが初めてであったが、もっと驚いたのは笑顔で教えていたことである。先生を神様と思つて崇拜し、同時に鬼のように怖いと信じていた小生にはなんとも不思議な気持ちがあった。九州プロゴルフ協会の会長による個人レッスンの後、鈴木氏の第一打目は多少チヨロギみ。にもかかわらず取り巻きの間からは「ナイスショット！」の一声。一瞬静まり返ったかと思いきや、突然拍手の渦。いやいや、さすが元総理大臣。

今から考えると大学に進学してゴルフ部に入部したほうが練習できたのではないかと思う。いずれにしても、暑い日、寒い日、雨の日、風の日、雪の日にゴルフはしたくない。ああゴルフ人生、かな。



## 会社紹介

タナシン(ヨーロッパ)社

上坂 彰

弊社がおります業界以外の方には恐らく全く馴染みがない会社だと思いますのでハンガリーにおける弊社についてのご紹介前に「タナシン」について少しお話をさせていただきます。

親会社はタナシン電機株式会社と申しまして一九六三年(昭和三八年)に前身のテープレコーダーメカニズムR&D会社として設立され、一九六七年(昭和四二年)に現在の株式会社として出発いたしました。社長は田中新作と申します。本社は東京都世田谷区深沢と言うところにあり、最寄の駅は新玉川線の桜新町です。この駅名の通り桜の季節になると非常に美しい桜並木が出現し、目を

楽しませてくれます。近くには「サザエさん博物館」があり、いつも多くの老若男女が見学に訪れます。弊社は設立以来、主としてオーディオ用のカセットテープレコーダー(Cメカニズム)の設計開発/製造を行ない、現在までにホームビデオ・8mmカムコーダー用のVHSデッキメカニズムの開発設計/製造、又現在の主力商品である車載用CDメカニズムを手掛けております。

これらの商品を日本内外の完成品メーカーに納めており好評を頂いております。納品先の一例として松下電器産業・JVC・三洋電機・BOSSCH BLAUPUNKT(ドイツ)社等にお世話になっております。かつては一五社を数えるほど日本国内に自社工場/協力工場を有しておりましたが、世の中の趨勢に習い、他の製造業と同様に東南アジアに製造拠点をシフトいたしました。現在はインドネシアに一工場、マ

レーシアに二工場、中国に二工場を製造拠点として活動いたしております。CDメカニズム/CCメカニズム/MDメカニズム等の車載用/ホーム用を併せると年間三千万台近くのメカニズムを製造しております。

更に蓄積されたメカニズムの設計ノウハウ/製造技術等を駆使して新たなビジネスを創造しております。

一方、これらの蓄積されたノウハウを利用してヨーロッパ屈指の車載用オーディオメーカーとタイアップして、ここハンガリーのケチケメート市にCDメカニズム専用の生産工場を合併にて一九九七年よりスタートいたしました。この関係で弊社タナシン(ヨーロッパ)社も同市内に設けております。

ケチケメート市は観光ブックにも少しだけ載っており、音楽家コダーイの生誕地として有名で現在はコダーイ音楽学校で多くの音楽家を輩出しております。この学校には日本人

も留学生として当地に滞在していると聞いております。特に市役所にある鐘から毎正時に流れるゴダールの曲は独特な雰囲気醸し出しております。

また、当市で一番大きなホテル R A N Y H O M O K (アラニーホーモック)の意味は「金の砂」であり、これが示すように B A R A C K (バラック・あんず)の生産に適した土地柄で名産品となっております。近くには馬の調教を観光にした B U G A C (ブガツ)があり、夏には多くの観光客がケケメート市を中心に訪れます。

さて、弊社はドイツ デュッセルドルフにありますヨーロッパ内の営業拠点に所属する、技術活動を中心とした目的で二〇〇〇年一月に設立致しました。主たる目的としては合弁会社の品質/製造技術のサポート、ヨーロッパ域内における営業技術を中心としており、小規模の生産

能力も有しております。

この関係で現在のところ極めて少人数にて活動しており、日本人技術スタッフが二名、ローカルの技術が二名、その他の管理部門が三名の小所帯です。この為、技術打ち合わせや品質確認等で合弁工場を含めて客先を飛び回ることが多く、なかなかじつとしてられない状況です。

来年からは新機種が合弁工場にて立ち上がる為に技術資源の増強を図る目的で技術者を増やしていく事も考慮しており、仕事をしていく上で楽しみが増えております。

このハンガリーにおいてはまだまだ新参者ですが今後共、公私共々宜しくご鞭撻/ご教授をいただけますよう、この場をお借りしてお願い申し上げます。

## 補習校児童作品

### 作文

おもしろかったぶんかさい

一ねん やぶき ひろむ

おもしろかったぶんかさいのげきは、ラジオたいそう。ちがうことをやったり、しかもたいそうじゃない。おわり。あつ！そうだ、あとこわいはなしがたのしかった。しかも、四ねんのたけるくんが、たのしかった。あと、たるうくとしゃべったとき、うしろにひとがいて、ぼくがくさいおならをした。

ぶんかさい

一ねん し水 めぐみ

くじらぐもをしました。そして、いろいろみてたのしかったです。三

ねんせいと六ねんせいがおもしろかったです。ほかにいろいろおもしろかったです。

わたがしをたべました。とてもおいしかったです。ほかにいろいろおいしかったです。おにいちゃんは、とけいをつくり、また、もうひとりのおにいちゃんはビーだまをつかってなんかのめいろをつくりました。そして、わたしは、キーホルダーをつくりました。

ぶんかさい

一ねん と山 ふみか

くじらぐもをしました。おもしろかったです。とくに、コントとか、ラジオたいそうが、おもしろかったです。三ねんせいのちいちゃんのかげおくり、かんどうしました。

おみせでおこのみやきとか、サンドイツやとか、トサカやとか、わたがしとか、ポップコーンとかがおもしろかったです。ドリンクもありま

した。一ばん上のへやにわたしたちのつくったキーホルダーやえとぶんもおいてありました。たのしかったです。

ぶんかさい

一ねん かみや ゆりこ

くじらぐもをしました。そのあと、のんちゃんとポップコーンをたべました。さけちゃんとあそんでたのしかったです。

ぶんかさい

一ねん きくほ かんた

ぶんかさいでポップコーンをたべました。おいしかったです。あと、わたがしもたべました。おいしかったです。そして、おこのみやきもたべました。おいしかったです。

おもしろかったものは、ラジオたいそうでした。

## ぶんかさい

一ねん カーチョル ベンツェ  
ポップコーンがおいしかったです。  
ラジオたいそうがへんだったからおもしろかったです。ピアノがおもしろかったです。ロボットがおもしろかったです。それと、四ねんせいのかわいはなしがおもしろかったです。ちいちゃんのかげおくりもおもしろかったです。

## ぶんかさいがたのしかった

一ねん こいけ たろう  
上にいって、ぼくのキーホルダーをみつけました。ラジオたいそうがおもしろかったです。しょうてんがおもしろかったです。トサカやおもむすびをたべました。にほんこくないクイズでクツキーをもらいました。スイミーがおもしろかったです。ロボットがありました。ロボットをうごかしました。こわいはなしもおもしろかったです。

## 楽しかった文化祭

二年 上さか みどり  
文化さいで「スイミー」のげきをした。さいしょはへただったけど、とうじつはけっこううまくできたとおもった。

一ばんおもしろかっただしものは、「ラジオたいそうこうざ」だった。ことしのお店は、たべものやさんばかりだった。六年生の「サンドイツチ点 すなのまじよ」のげんてい五十このやきにくサンドをたべるためにずっとならんでいた。そのあいだに六年のてるたかくんがおもしろいことをしてくれて、おもしろかった。

一ばんおいしかったものは、わたあめだった。たべものをもらうには、チケットがないともらえなかった。わたあめのようなチケットは一まいしかなかった。けど、友だちのかずまさくんが、「ぼく、このわたあめのチケットいらなからやるよ」といっ

て、わたあめのようなチケットをくれた。二こめをたべおわって（わたあめ）あるいていると、わたあめやさんの子が、

「みなさん、もうチケットがない人もたべられますよ！」といったので、三つわたあめをたべた。そのことをおかあさんとおとうさんにいったら、「そんなにたべて、だいじょうぶなの？」ときいた。

わたあめのはじめは、一つめはぶどうあじ、二つめは、ぶどうとバナラのミックス、さいごはじかんがなく、わたあめをつくっていたおじさんにバナラあじがほしいといったら、「さくらんぼあじを少しだけ作ってしまったからミックスしてもいい？」と、きいたので、「いいよ」とこたえて、さくらんぼとバナラのミックスを食べた。一ばんおいしかったのは、ぶどうあじのわたあめでした。

## 文化さいでがんばったこと

二年 木村 たける

ぼくは、十六日土요일に、文化さいをやりました。ぼくが、一番おもしろかっただしものは中二の、「ラジオ体そうこうざ」です。

ぼくたちがやったのは、「スイミー」です。ぼくたちが、げきをやっていたとき、おとうさんがビデオカメラでとってくれました。それで、スイミーがおわったあとは、ほかの学年のげきを見ました。

一番おもしろかったのは「ラジオ体そうこうざ」だけど、小六がやった「ほしゅう校しよう点」もおもしろかったです。

食べものでおいしかったのは、ポップコーンです。あと、わたあめを二回食べました。二回目にミックスしてもらいました。ミックスしてもらったのは、すいかとさくらんぼです。ほかに、食べました。ほしゅう校のお店はおもしろかったです。

## がんばったげき

二年 林 ひろき

ぼくは土요일に、文化さいで、げきをやりました。いっぱい、げきを見ました。ぼくは、スイミーをやりました。さいしょは、どきどきしました。だけど、だんだん慣れてきました。げきがおわったら、ぼくは、あんしんしました。

つぎに、食べものを食べました。さきに、わたがしを買いました。けれどわたがしを先に買うとつぎのが食べれませんでした。だからわたがしをがんばって食べました。それで、はんぶんぐらい食べたなら、だれかの、たんじょうびに行かないとだめだったので、ジュースとポップコーンを二つ食べました。そして、学校を出たら、おとうさんとおとうとが来て、すれちがいました。おとうさんたちは、ほしゅう校にのこって、ぼくとおかあさんは、たんじょう会に行きました。

## 日本国内クイズ

二年 みどり しゅんすけ

五年生が文化さいのとき日本国内クイズをやりました。日本の中のクイズなので、むずかしかったです。クイズの答えを当てたら、クッキーがもらえました。クイズの一番さいごにクッキーをなげてくれました。五年生がなげたクッキーを、ぼくは四つとりました。とったクッキーの一つをいもうとにあげて、あと二つを一年生のたろうくんとかんたくんにあげました。あと、のこったクッキーは、ぼくのだから、だれにもあげませんでした。そのクッキーは、とてもおいしかったです。

## 文化祭

三年 横山 聡美

文化祭はたいへんでした。なぜかというと、朝七時から学校に行っておこのみやきの用意をしなければいけなかったからです。

さいしよのぶたいは、とつてもおもしろかったです。一番、中二のぶたいがおもしろかったです。それは、ラジオ体そうでした。ひろあきくんがクルクルとぶたいの上で回ると、みんながワーツとわらいました。

おひるから、わたしはおこのみゃきのお手つだいをしました。もえりちゃんといっしょにやりました。お客さんがたくさん来てくれて、「おいしいよ」と言ってくれたのでうれしかったです。わたしは、サンドイッチとわたがしとポップコーンを食べました。みんなおいしかったです。

## 文化さい

三年 くり田 かずまさ

人形げきをする前はすぐきんちょうしていたけど、やってみたらすごく楽しかったです。終わったら、たくさんの人からはく手をもらって、すぐくうれしかったです。

出店の時、陽介くんと店が始まる

まで走り回っていました。さいしよに始まったところは、中二のサンドイッチでした。中をよく見たら、自分のクラスの教室でした。すごくおいしかったです。次は、わたがしを買いに行きました、でも、一人では食べきれないくらい大きかったから、陽介くんの食べさせてもらいました。おいしかったです。

次は、六年生のサンドイッチを食べに行きました。やき肉サンドがおいしかったです。二回目は、チケツトなしで食べさせてくれました。六回、やき肉サンドを食べました。また、食べたいです。

## 楽しかった文化祭

四年 河崎 匠

先週の土よう日に文化祭がありました。

一番楽しかったのは、中二の「ラジオ体そうこうざ」で、みんなで大笑いしました。

そして、ピアノとバイオリンのえんそうがよかったです。ピアノストのお話がおもしろくて、曲の中では「きらきら星の変そう曲」が一番気に入りました。そして、りさ子とわかなが、デュエットでバイオリンをひいていたのもよかったです。

食べ物では、お好み焼きが一番で、ポップコーンが二番目においしかったです。四年生はわたあめ屋をやりました。ぼくは妹に、ブドウ味のわたあめを作ってあげました。妹は、「おいしい」と言って、口の周りをむらさき色にして全部食べました。お母さんは、「日本とちがっているいろいろな味があつておもしろいね」と言いました。ぼくは、わたあめを食べるのはきらいだけど、作るの好きです。

## おいしかった文化祭

四年 園部 健

一番おもしろかったげきは、六年生と中学二年生でした。なぜかという、てるたかくんが先生役だったのに、生とたちの方がせが大きかったからです。そして、島田先生のつつこみもおもしろかったです。中学二年生のげきは、ラジオ体そうなの、変なギャグばかりしていて、特にしようたるうくんのつつこみが、おもしろかったです。

お店では、六年生がやっていた「すなのま女」の焼肉サンドと、五年生のお好み焼き屋さんがかつたです。トサカ屋という、たまご料理屋さん、意外なところでひらかれていたので、お客さんがあまり来てくれないというか、見つけてくれないという感じで、ひっそりとひらいていました。おにぎりがおいしかったです。

中学二年生がひらいていたサンド

イツチ屋さんでは、きゅうりがたくさんあまっているのを見つけました。十五本くらいはあったと思いました。

## 文化祭

四年 ブランド 英理久 健

十一月十六日土曜日、「あー、今日は文化祭だ」。早く学校に行つて、ホールにい動しました。

最初に一年生が「くじらぐも」をやりました。その後五年生が「Let's Answer 日本国内クイズ」をやりました。ぼくは、最後クツキーの入ったふくろを取ることができました。答えなかつたけれど、プレゼントをもらつて、うれしかったです。

ピアノコンサートの時、ぼくは前から三列目で聞いていました。指の動きが早いのが、よく見えました。ピアノの頭は、あっちこっちに動いていて、とてもおどろきました。

午後の出店では、けんすけ君が焼

いてくれた「シーフードお好み焼き」が、とてもおいしかったです。

## 文化祭

四年 堀部 和加奈

「ドキドキ」と、私の心ぞうは、高鳴りました。次は、いよいよ私たちの番です。小四のげき「こわい話」が始まりました。この台本は、私たちがいつしようけんめい考えたものです。私は、おばけ役でした。おばけらしく黒いふくを着ました。私はできるだけ大きな声でしゃべったけど、お母さんには聞こえなかつたらしいです。終わったときは、とても満足した気持ちでした。

その次は、私とりさ子ちゃんがバイオリンをひく番でした。デュエットは、とてもうまくひけたけど、ソロのときは、きんちようしてすぐくまちがえてしまいました。しかし、止まらずひけて、よかつたと思います。りさ子ちゃんのソロはとても上

手で、聞いていた私は、すごいなあ  
と思いました。

次に山本さんのピアノのコンサ  
ートがあり、それを聞いたら、なんか、  
うっとりしてしまいました。とても  
きれいなメロデーだったので、私  
もあんなに上手にバイオリンがひけ  
るといいなあと思いました。

次にわたあめ作りでした。でも私  
たちのグループは後半だったので、  
まずいろんなお店を回りました。最  
初に行ったのは、お好み焼き屋でし  
た。そこのお好み焼き屋は、とても  
おいしくてもう一つ食べたかったで  
す。でも、一人一つだけだから、ざ  
ん念でした。お好み焼きが一番おい  
しかったです。次においしかったと  
ころは、ポップコーン屋で、ポップ  
コーンにとても味がついていておい  
しかったです。次においしかったの  
が中二のサンドイッチ屋でしたが、  
小六のも同じくらいおいしかったです。

その後わたあめ作りを始めました。  
その時、初めのほうは、いっぱいお  
客さんが来たけど、後のほうになっ  
たらお客さんは全然来なくなつたの  
で、その間に自分たちのわたあめを  
作って待っていました。そして、ま  
たお客さんがたくさんやってきまし  
た。お母さんは来ると言っていたの  
に、なかなか来てくれませんでした。  
やっと終わりがそろお母さんが来て、  
「わたあめを作ってほしい」と言う  
ので、おじさんに聞いたたら、「いい  
よ」  
と言ってくれたので、お母さんに作  
ってあげることができました。すべ  
りこみセーフでした。

今回の文化祭は、前よりもつと楽  
しかったです。来年ももっと楽しく  
なると思います。

## 文化祭の出し物

五年 翠 直孝

初めての文化祭をやりました。ま  
ずは、一年のげきを見ました。その  
次にぼく達の方言クイズをやりまし  
た。問題を全部言いたかったけど、  
二問しか言えませんでした。しかも、  
二問とも一発で当てられてしまいま  
した。ちよつとくやしかったです。  
でも、順調に最後までできたのでう  
れしかったです。

三年のげきの「ちいちゃんのかげ  
おくり」を見た時は、悲しくなりま  
した。六年の笑点はあまりおもしろ  
くなかったけれど、中二のげきはす  
ごくおもしろかったです。おもしろ  
かったので、また見たいです。中一  
と中三のげきは、のび太（たろうく  
ん）がおもしろかったです。

一番多かったのは、紙人形です。  
ぼくは、紙人形などよりも、実際に  
人がえんぎするほうがいいと思いま  
す。全ての学年の出し物が成功して



良かったです。おもしろいげきもあったので、来年のみんなの出し物にきたいしています。

### 緊張した文化祭

五年 山崎 勇祐

今日は、二回目の文化祭だ。ちょっとお好み焼きのことが心配だった。まず最初は、クイズだ。ぼくは、マイクを持って回る時が少し心配だった。そして、ぶじ出し物は終わった。

さあ、いよいよお好み焼きだ。いよいよ始まった。ぼくは、もやしはあまり売れないと思っただけ、予想に反してけっこう客が来た。来たのは、ほとんど大人で、子供は少ししか来なかつた。途中、ハンガリー人も来たのでびっくりした。びっくり返すのをあまり練習していなかつたので自信なかつたけど、実際やってみたらほとんど成功した。すごくうれしかった。だけど、一回だけ失敗

してしまった。その失敗したお好み焼きをお客に出す時、すごくもうしわけない気持ちになった。でも、ぎやくに失敗したのが一回だけでよかったなあと思つた。緊張したけど、楽しい文化祭だった。

### 初めての文化祭

六年 栗田 晃孝

秋。文化祭の季節がやって参りました。僕が日本を通つていた兵庫県川西市、荻原台西にある市立明峰小学校および、川西市内の学校は多分、文化祭はしていません。

早い話、僕自身、文化祭に学校側として出席したことがないので、初めての文化祭と言えます。

まず、出し物では、Y君とK君に文化祭がどのようなものかと聞き、そして、コントの本題の前で、みんな、グループ名は“Y・K・K”です。

十一月になって、本当に皆の前で発表したり、いそがしく食べ物をわたしたりする日が近づいて来ました。もう、皆も、まとまってきていました。

そして運命の日。劇。とても緊張していたけどよくできた。店。清水郁馬君の『\*とつげき中二のひるめし大作戦』でうまくいった。

前の小学校の行事よりも、補習校の行事の方がずっとおもしろいと思いました。

来年もガンバリたいです。

\*とつげき中二のひるめし大作戦・・・中二の店へ行って、どれだけ自分たちがやっているかをひろうすること。結きよくは、追い出されたけど、でも、客は増えた。

### ねむかった文化祭

六年 コズマ ロバート

朝五時五十分に電話がかかってきた。「だれだ、このばか、今日は土曜

日だぞ！補習校は九時まで始まらないぞ！」と思って出たら翼君だった。パツと、頭にきた。今日は文化祭だ、まだげきのせりふを覚えていない！」やばい、今から覚えなないと、思ったらもう六時十分だった。早く朝ごはんを食べようとすると、お母さんが来て、ゆっくりお茶を作つて、「これを飲んでから出発しないと、でないと、お腹をこわすから」と、言ってきた。お茶がまだ、熱かったので飲むのに十分かつた。急いでメトロまで行くと、間違えてM3乗り場へ降りてしまった。やつと十五分遅れて補習校に着くと、もうみんな調理室でサンドイッチを作つていて、早く急いできた意味がない感じがした。出し物が始まつて劇で寝る役をしていた時、すっかり本当に寝てしまった。

出店の時は前半グループと少しけんかをしてしまった。焼肉が売り切れた後、僕がベーコンを焼いて、ま

た人が来るようになった。だけど、ブレーカーが落ちて、ホットプレートを下部の部屋へ移動すると、お釣られて来ていた客がなくなつて、結局ベーコンが余ってしまった。おまけに、ベーコンに間違えて焼肉ソースを全部使ってしまった。これで今回の文化祭も終わった。来年の文化祭も今から楽しみだ。

### 大失敗のサンドイッチ店

六年 古川 友梨

土曜日、とうとう待ちに待った文化祭がやって来た。私は、その日、朝から緊張していた。

学校に行くと、みんなはもう調理室に集まつていた。私は店になる教室の黒板に、かざりの絵を描いていた。私は、もう準備は整つたと思つたが、その時には、まだまだ必要なものがそろつていなかった。

各学年の出し物が終わりピアノの演奏も終わり、とうとう出店の時間

が来た。小さい子ども達が私達をはやしたてる。気がつけば、もう、他の店が開店しているではないか。しようがなく、私達は、開店した。開店すると、間もなく、小さい子ども達など、焼肉サンドを食べに来た人たちの行列ができた。

しばらくして、ももちゃんが、指づかみで、焼肉をパンにはさんでいるのを発見、これは、失敗の一つであった。失敗はもう一つある。それは、ピアノの演奏の後、チラシを配つたことであつた。チラシを配りながら、「焼肉サンドは五十個げんたいです」と、言つたので、さらにたくさんの人を集めてしまったのだ。そして、私達、前半グループは、ずっと、お客様達に、急ぎ立てられたのであつた。

来年、もしここにいたら、もう少し考えてからチラシなどを配つたほうがいいと思つた。持つてくるものも、何度もチェックしようと思つた。

## 文化祭

中一 堀部 晃平

十一月十六日、朝八時、補習校でT君と出会った。それから出店のために準備をした。初めにやって来たのは、劇だった。僕は、もう前日にセリフをほとんど暗記していたと思っていた。しかし、舞台の上に立つたら、声が小さくなり、セリフもなかなか思い出せなくなってしまった。劇が終わってホッとしたけど、僕は納得できなくて、悔いが残ってしまった。もう少し、劇の練習に取り組んでおいた方がよかったと思う。自分に点数をつけるなら、百点中五十点以下だと思った。

それに比べ、店の方は、上出来だった。初めは、あまり人が来なくてちよつとがっかりしていたけど、先生達が呼び込みをしてくれて、お客がどんどん入ってきて、とても良かった。

一つ不満なのは、他の店にあまり

行けなかった事だ。最後の十分くらいしか回れず、少し残念だった。

## 後の祭り

中二 室本 一樹

今、係りでもないのに皆の前に立っている。背を向け、縮こまる者あり。耐え切れず開き直る者や木刀を手に解説する者もあり。「ラジオ体操」だ。僕はこれまで生きてきた中で、二、三位に値するほどの恥ずかしい事をするなんて、思ってもいなかった。

クラスで練習していたあの日・・・「じゃあ、一樹は四つ目で、この中二最高の芸で行こう」。

もちろん、僕は嫌だと言った。しかし皆聞き入れてはくれない。なぜなら、僕がリーダーだからだ。結局、本番でもあんな笑われる役になったのだ。

今思うと、あの芸を嫌だと強調して言うておくべきだった。思えば、

じゃんけんに負け、リーダーになった時点で全てが始まっていたように思える。さらに振り返れば、そもそも運動会で中央の三人になったところからこうなることが決まっていたとも言える。

## 文化祭

中三 木村 祐太郎

客は波にそっくりだ。私はそのよくなことを考えていた。今は大半の客は、他の店にいるようで、私の居るポップコーン屋には、誰も足を向けてこない。店が開いてから、もう三、四回客は満ち引きを繰り返している。忙しい時は、本当に忙しい。トウモロコシの実をカップ一杯掬い、塩を一匙弱かける。油を半デシリットル量り、倉庫部屋から新しいジュースパックなどを取ってきて、ポップコーンの袋を開く。この間、約三分だ。高一が手伝ってくれているお陰で滞りはしていないものの、少々

**俳句作品**

辛い。しかし、客が引いている時は、完全に手持無沙汰となる。つまり今がそうだ。

果たして、文化祭にはどのような意義があるのだろうか。暇にまかせて考え始める。

一、レクリエーション

二、友人や他の学年との団結

三、普段できないことへのチャレンジ

四、集団活動の経験

このあたりが、意義であろうか。しかし、嫌なことも多いであろう。

a、休みが減る。

b、授業時間の減少（私ではない様だ。）

c、練習等による個人の自由時間の減少

d、補習校の大量出費

dは私には関係があまりない、そう考えるとやはり文化祭は……。

また、波が来るようだ。

小四 大河内 瞳子

しゃぼん玉 春をむかえに とびだつよ  
白い雪 プレゼントだね 星からの

小四 小笠原 健太

カメレオン 色が変わって 大変身！  
アオカナブン みどりの体が いかして  
る

小四 神谷 理沙子

初雪や 思いで流す チラチラと

小四 栗原 晃平

初雪や おさとうみたい チイラチラ

小四 蘭部 健

秋になり 葉っぱが紅葉 木もおしゃれ  
ももたろう さるきじいぬと おにいた  
いじ

小四 河崎 匠

クリスマス サンタクロースいそがしい  
寒い冬 雪がふるので おお寒い

小四 ブランド 英理久

秋になり おちばの道で 白いいき  
初雪や 手ぶくろどこかな 冬じたく

小四 細川 晃平

夏の月 夜おそくにね 出てくるよ

小四 堀部 和加奈

雪の日に 走ってみると 雪入る  
いっぱい雪のけっしょうきれいだな

小四 村松 孝訓

冬の日 畑にできる しもばしら  
初もうで 人があつまり なにねがう

小四 吉原 岬

夏早し ブダペストはもう 衣がえ  
まん月に すずきがかかる 月見の夜

虫が飛ぶ 夏が始まる 合図だよ  
小五 太田 祥子

白い息 ふわふわと舞う 雪結晶  
小六 上坂 桃

復活祭 きれいな卵 作ります  
中一 ヴェセリ ノーリ

春の日に しつ風吹けば 桜ふぶき  
小五 塘 健介

川岸に 青草咲きし 春のうた  
小六 栗田 晃孝

大海を さっそうと飛ぶ 飛魚よ  
中二 太田 寛朗

しんしんと 雪がまいちる 寒い朝  
小五 細川 萌里

Eメール 文字化けするよマテマティカ  
小六 コズマ ロバート

試練道 川上り行く 鮭達よ  
中二 室本 一樹

強い風 がんばる秋桜 すてきだな  
小五 翠 直孝

枯れ草を ふんだらもうすぐ 冬が来る  
小六 清水 郁馬

日が照ると オレンジ色に 光るびわ  
中二 横山 知沙

冬の時期 クリスマス待つ 子供達  
小五 山崎 勇佑

秋が来た 北風に乗る 枯れ草来る  
小六 古川 友梨

淋しさを 共に味わう 裸の木  
中三 上原 彩香

夏の海 きらきら光る 魚たち  
小五 横山 ゆか

紅葉の 落ち葉のじゅうたん 秋模様  
小六 吉原 翼

びわの実を かじりし枝が 秘密基地  
中三 木村 祐太郎

恋わずらい 枯れ木になった 恋心  
小六 上原 康士朗

髪ゆえば かくれんぼした 汗見つけ！  
中一 大河内 薫子

顔だけは 避けることできぬ 氷点下  
中三 本 貴之

流れ星 星に願いを 言いたくて  
小六 小野田 陽

北風と 落ち葉が告げる 冬の朝  
中一 村松 佳奈

## 訃報

『異星人伝説』の著者マルクス教授（ハンガリー科学アカデミー会員）が、去る一二月二日逝去されました。享年七六歳でした。教授は長らく前立腺癌を患っていらつしやいました。が、すでに転移は全身にわたっていました。しかし、短期の入院以外は、療養生活に入ることなく、電磁波治療を受けながら、物理教育の国際会議出席のため、インド、アフリカなど訪れ、最後の瞬間まで精力的に物理学の普及のために命を捧げられました。

教授はエトヴォシユ・ローランド大学原子物理学科に籍を置き、原子物理学理論を専攻され、長らく学科長を務められました。また、エトヴォシユ協会会長の任期を終えた後も、実質的な事務局長として最後まで活動されました。

軽粒子数保存を発見しただけでなく、非常に早い段階で宇宙の暗黒物質がニュートリノのような宇宙線に満ちていることを予測しましたが、国際的な場での論文発表が遅れ、ノーベル賞を受賞することはできませんでした。

後年は物理教育に力を注がれ、イギリス物理学会のブラッグ賞を受賞されました。日本の物理学者と親密な関係を保ってこられただけでなく、日本の物理教育者の活動にも力を貸され、多くの高校物理教員の尊敬を集めていました。また、ライフワークとしてハンガリー出身科学者の足跡を追い、それをまとめる作業に精力を尽くされ、今年一月一四日には、ハンガリー科学アカデミーの“Scientist of the Year, 2002”を受賞されたばかりでした。

昨年、シモニイ教授に次ぎ、ハンガリーは優れた物理教育者を失いました。ご冥福をお祈りします。



去る一月一四日、ハンガリー科学アカデミーにて、「二〇〇二年科学者賞」を授賞されるマルクス教授（左端）。演壇中央は、アカデミー総裁。

## 追悼

### マルクス・ジョルジュ

(1927 - 2002)

#### 小沼 通二

ハンガリー科学アカデミー名誉会員

エトヴォシユ物理学会名誉会員

慶應義塾大学名誉教授

マルクス・ジョルジュ（ジョージ・マルクス）は、ブダペストで一九二七年五月二五日に生まれ、エトヴォシユ大学を卒業し、この教授となり、エトヴォシユ物理学会（ハンガリー物理学会）の会長を務め、ハンガリー科学アカデミーの会員になった物理学者である。国内でも、国際的にも、非常に幅の広い精力的な活動を続けてきた。晩年はガンの転移と闘いながら、国外での国際会議にもたびたび参加してきたが、二

二年一二月二日にブダペストで帰らぬ人となった。

#### 「異星人」のこと

彼の著作の中から二一年末に、『異星人伝説 二世紀を創ったハンガリー人』が、盛田常夫さんの編訳で日本評論社から発行されたことをご存知の方がおられると思う。これは、ハンガリーの科学と科学者についてのマルクスの精力的な分析や直接のインタヴューにもとづく英文書（*The Voice of the Martians, 2nd edition*、1997）とそのハンガリー語版（*Amarstakók érzése*、2000）を基にして、編訳者が著者と相談して新稿や編者の補遺を含めてまとめたものである。ブダペストでも出版のお祝いがあったと聞いているが、二二年二月には、東京のハンガリー大使館でセルダヘイ・イシュトヴァーン大使が主催して、出版記念会が開かれた。ここでは大使自身と、吉

川弘之日本学術会議会長、フランクル・ピーテル早大教授、笠耐元上智大学助教授と編訳者の盛田さんがそれぞれ興味深い話をされた。

異星人というのは、二世紀に世界各国で活躍した科学者などの人材の中に、ハンガリー（特にブダペスト）で生まれた人が非常に多いのは、文化の進んだ星から宇宙船がブダペストに彼らを運んできたためであるうという意味でつけられた題であるが、もっと詳しくは、本書をぜひ読んでいただきたい。

ジョージ（私は彼をこう呼んでいた）は、*The Voice of the Martians* の一九九四年の初版も、第二版も、一九九八年に出た第三版（これはCD版のみ）も、その度に手渡してくれた。一九九七年五月の彼の七歳を記念する国際シンポジウムの際には、献辞の最後に、ユーモラスに「火星にて」と書いて第二版を渡してくれた。このときの彼の笑顔は、今でも

目に浮かんでいる。

大使館での出版記念会に参加していた私は、ジョージも疑いなく異星人だったと思い続けていた。

## マルクスとの出会い

振り返ってみると、一九七五年六月にバライトンフュレットで開かれた国際ニュートリノ会議という物理の国際会議で、彼は開会演説をおこなった。この会議は一九六八年から続いてきたシリーズの会議の五回目だった。彼はこの会議のオーガナイザーのひとりであり、熱心な中心人物だった。私はそれ以前から彼の名前をニュートリノ物理や宇宙物理の論文を通して知っていたが、直接話をしたのはこれが初めてで、それ以来世界中のいろいろな場所と場面でしばしば出会うことになった。彼は議論を楽しんでいたし、彼の意見はいつでも核心を突いていた。

マルクスが始めて日本に来たのは、

一九六五年のことだった。彼は、日本で始めてのノーベル賞受賞者であった湯川秀樹博士が所長をしていた京都大学基礎物理学研究所に数ヶ月間滞在した。その当時、私は、ヨーロッパにいたので、彼に会うことはなかった。

一九七七年には、神戸の北の三田で超高エネルギー弱相互作用国際ワークショップが開かれた。私は、当時京都大学にいて、この会議の組織委員会の幹事だった。彼はこのワークショップ・シリーズの創設者の一人であり、日本の会議はシリーズの第五回だった。会議終了後、彼は京都に来て、私の家族のために、台所に立ってハラスレー（パプリカベースの鯉スープ）を作ってくれた。私が数年前にバライトン湖畔で、ハラスレーを食べたことを覚えていてくれたのである。

一九七九年六月の夏至の前後に、ノルウエーのベルゲンでニュートリ

ノ会議が開かれたときには、会議終了後北に向かってドライブするのだけれど行かないかといって誘ってくれた。私は数日後にスイスのジュネーヴの研究所に行くことになっていて時間があつたので喜んで同行した。その後若くして亡くなった彼の息子を含めた三人組であり、運転を交代しながら、フィヨルドや氷河の数日の旅を楽しんだ。

## 物理教育への情熱

彼と私の接点は、物理の研究だけではなかった。一九八三年に私は京都大学から慶應義塾大学に移り、初めて学部教育を担当した。私は、大学以外に勤めた経験はないのだけれど、それまでは、日本でもヨーロッパでも、研究と大学院教育に集中してきたのだった。初めて学部教育をやってみて、これは大事なことだと実感した。一九八六年になって上智大学で物理教育国際会議が開かれた。



さそわれて出席した私はそこで、ジョージに会った。私は、彼が大学教育だけでなく、高校教育の改善にも熱心なことを発見した。それだけではなかった。ジョージは、大学教員と高校教員の協力と交流に情熱を傾けていた。

一九九一年には、エトヴォシユ物理学会(『異星人伝説』にはエトヴォシユ協会と訳してある)創立百周年の式典と記念シンポジウムが開かれた。当時私は日本物理学会会長をしていたので、参加を求められ祝辞を述べた。この会が終わると、私はジョージにヤスベレニーで高校と大学の物理教師の会が行われているので話をしてほしいと頼まれた。ジョージは通訳をしてくれた。彼は高校の教師たちに信頼されていた。

一九九八年にハンガリー科学アカデミーが私を名誉会員にしてくださいることになった。この年にはハンガリーを訪問する機会がつかれなかつ

たので一九九九年になって記念講演を行い、アカデミーのクロオー・ノルベルト事務総長からラテン語とハンガリー語で書かれた伝統的なスタイルの名誉会員証が授与された。ノルベルトも物理学者で、数年にわたってユネスコの仕事を一緒にした友人である。この会でもジョージは司会をしてくれた。この時には、日本を出る前に、セグドで二一世紀の科学教育についての会議があるので、講演をしてほしいと主催者から頼まれていた。ブダペストからセグドまでは、ジョージが車を用意して同行してくれた。セグドの会議での仕掛け人もジョージだったし、講演と質疑の通訳も彼が務めてくれた。

日本では高校教師と大学の教師のつながりは、一部の人たちの例外のぞけば、先に述べた上智大学の会議で初めて生まれ、今日までこの伝統が続いているのだが、この仕掛けを作ってくれたのもジョージだった

ことを後になって知らされた。

彼とはまた別の接点もあった。ジョージは、物理学の国際的連合組織である国際純粋応用物理学連合の副会長を務め、この中の物理教育委員会の委員長も勤めた。私は一九九六年にスウェーデンのウプサラで総会が開かれたときに彼と一緒に、ジョージはいつもユーモアに満ちて、シャープな意見を述べていた。

### バグウォツシユ会議のこと

読者の皆さんは、バグウォツシユ会議という名前を聞いたことがあるだろうか。世界中から核兵器などの大量破壊兵器を廃絶させるための提言を続け、それまでの間、使用される危険性を減らし、なくしていこうという世界中の科学者の組織である。東西冷戦のさなかに一九五〇年代の始めから水爆開発競争が激しく続いていて、核兵器実験によって世界中に放射能の雨が降り続いてきた。核

兵器を全面的に使う第三次世界大戦が起これば、人類絶滅の可能性が高い。これが東西双方の科学者たちの考えだった。核兵器をなくしても、国際紛争が続けば、作る国が出てくるかもしれないので、国際紛争は戦争以外の手段によつて解決しなければならぬとも考えた。一九五七年にカナダのパグウォツシュ村で誕生したため、組織名をパグウォツシュ会議としたのである。一九九五年は、広島・長崎の原爆から五十年間だったので、広島で七月に年次大会を開いた。私が組織委員長だったが、ジョージは始めてパグウォツシュ会議に参加した。

この会議と会長のジョセフ・ローブラットがノーベル平和賞を受賞したのは、この年の一二月のことだった。

一九九八年二月一日は、ジョージの言う異星人の一人スィラード・レオの生誕百年だった。この日にあ

わせてハンガリーでいろいろの行事がおこなわれた。最初はデブレツェンでの「科学と倫理についてのパグウォツシュ・ワークショップ」だった。

ヒットラーのドイツが原爆をつくり、使うことを恐れたスィラードたちは、それを防ぐには連合国が原爆を作り、ヒットラーが使ったら、それ以上の報復をするという以外ないと考えて、アインシュタインを動かして、原爆開発のマンハッタン計画開始のきっかけを作った。この計画の原爆完成以前にドイツは原爆を作れないことがわかり、ドイツの降伏によつてヨーロッパでの戦争は終わった。スィラードたちマンハッタン計画の科学者は、日本に対して原爆を投下することがないように、次々に手を打ったが成功しなかった。

このようなわけで、スィラード生誕百年の機会に科学者の社会に対する責任・モラルについて討議するこ

とは、大変適切だった。これに続いて、ブダペストで、スィラード記念セミナー、国会議事堂での記念式典、ワークショップ「持続可能な発展と民主主義」、エトヴォシ物理学年会でのスィラード関連セッションなどがおこなわれた。私は国会議事堂での講演と、物理学年会での講演をエトヴォシ物理学年会長のジョージから頼まれた。私がエトヴォシ物理学会名誉会員に推されたのはこのときだった。

#### 冷戦時代の訪問

マルクス・ジョルジュとの付き合いはまだまだあるが、このあたりでとめよう。私が始めてハンガリーを訪れたときにはザグレブから列車で入国した、このときの国境での検査は、すべての荷物をあけさせて長い時間をかけて詳しく調べ、列車の座席をひっくり返して徹底的に調べるというものであり、東西対立の最前

線をまざまざと感じさせられた。この旅行では、バラトンフユレツドからウイーンの友人の車でオーストリアに抜けた。国境にはハンガリー側だけで二箇所を検問所があつて、その間は完全な無人地帯だった。このような状況の中でも、科学の国際会議では、国籍に関係なく率直な討論ができ、友情を深めることができたのだ。

### ハンガリーへの想い

私は、いくつもの国際学術団体に関係し、世界各国で開かれた国際学会にもしばしば出席したので、それぞれ思い出があるが、ハンガリーには特に親近感を感じてきた。アジア系の民族であり、周囲とまったく異なるアジア系(?)の言語をもっている。一九世紀の末から二世紀の始めにかけてのブダペストでの教育、特にエトヴォシュ・ローランドの貢献が、世界各国に飛躍したハンガリー

科学者たち、すなわち多くの異星人を生み出したことは疑いない。

マルクス・ジョルジュは、生涯をかけて、科学に貢献し、科学教育の改善・育成に努め、ハンガリーの科学と科学者を世界に知らせるための努力をしつづけたのであつた。これらの貢献に対して国内外から多くの賞を受けている。最晩年の二二年には、五月に彼の七五歳を記念する行事があり、各国から科学者が集まって、ジョージを囲んで宇宙論、宇宙物理、素粒子物理の歴史と将来の展望が討議された。一月一四日には、ハンガリー科学アカデミーが、ジョージを Scientist of the Year 2002として表彰した。だいぶやせたけれど、これらのときの笑顔の写真が残されている。

私はかけがえない友人を失った。彼の冥福を心から祈っている。

## 特集

### ノーベル文学賞を読む

#### ケルティース・イムレの世界

・不条理の中の条理・

盛田 常夫

二〇〇二年ノーベル文学賞を受賞したケルティース・イムレの処女作『運命の不在』(Sorstalanság Magevető, 1975, Budapest) は自伝小説である。sors は「運命」、talán は日本語と同じように「足らん」、ság は名詞を造成する接尾語である。語義をもっとも良く伝える訳としては、「運命がないこと」ということになる。小説の題名らしく、「ここ」では「運命の不在」としておこう。

B5版の三〇〇頁ほどの短い小説は、

ケルティースが一五歳の夏(一九四四年)から翌年の夏にかけて体験した事件を描写する。チェペルの軍事工場からアウシュヴィッツへ連れられ、そこからさらにブツヘンヴァルドの収容所に送られた実体験である。今更どうして「アウシュヴィッツ文学」がノーベル賞か、という疑問が湧くだろう。戦後、無数の報告や告発書、文学書が出ている。映画もある。屋上屋を重ねる必要があるのだろうか。

ところが、メディアの紹介とは異なり、以下に見るように、ケルティースの小説はアウシュヴィッツを告発するものでも、ユダヤ人迫害を告発するものでもない。「アウシュヴィッツ」告発という視点から見れば、ケルティースの小説よりはるかに恐怖と感動を与えるものが多いだろう。それならなお更、どうしてケルティースが、今、ノーベル賞かという疑問が生まれよう。

#### ケルティースの哲学

ノーベル賞受賞講演で語っているように、ケルティースの哲学は主体(主観)と独立した客体(客観)の存在を認めない。「客体」が「現実」であるのは、「自分」という「主観」を通してだ。その主観を経由しない客体は、彼にとって疎外されたものだ。この哲学的視点は、サルトルやカミュなどの実存主義的な現象主義に近い。この視点から、強制収容所を経験する少年が、その主観を通して観察した事象を、たんとんと叙述する。そこに、ケルティースの小説の特徴がある。だから、イデオロギ―も、予見もない。そうだからこそ、逆に、人々はケルティースの世界に、自己を同化することが容易になる。彼にとって、ユダヤ人もナチも強制収容所も皆、与件であり客体である。それが「現実化」するのは、「自分」を経由する、つまり体験することを通してである。とすれば、人が生き

ていくことは、生きていく限り回転していく世界を受容していくことであり、その与えられた条件や環境の中でしか、人は自由でありえない。だから、そのような「現実」から独立した「運命」など存在しない。したがって、「運命」で過去や未来を断定することに意味はないし、「運命からの自由」という考え方も人の生き様を説明しない。「運命」と「自由」という二分法は「生きること」を表現するのにふさわしくない。これが『運命の不在』で読者に伝えたいメッセージである。

### 「アウシュヴィッツ文学」か？

ケルティースの小説はいわゆる「アウシュヴィッツ文学」あるいは「ホロコースト文学」だろうか。既述したように、もし「アイシュヴィッツ」を告発するのが「アウシュヴィッツ文学」とすれば、ケルティースはこの範疇に入らない。ケルティ

ースの『運命の不在』は二つの点で、いわゆる「アウシュヴィッツ文学」と区別される。

一つは、主人公がアウシュヴィッツに滞在した時間はわずかに三日に過ぎず、アウシュヴィッツの生活が対象になっっているわけではない。もちろん、アウシュヴィッツを強制収容所の代名詞と考えても良いが、しかしケルティースにとって、自らがその大半の時間を過ごしたブツヘンヴァルドは、アウシュヴィッツとは異なる世界だったことが意味をもっている。アウシュヴィッツと異なる世界に生きたことが、彼を延命させ、かつ豊かな体験を獲得することになった。小説では主人公が体験した強制収容所の性格の違いが、一つのポイントになっている。

いま一つは、ケルティースが自らの五感で体験した事象をたんと描き、強制収容所の日常生活を克明に描写していることだ。そこには大

上段に振りかぶった正義感も、イオデオロギーも、告発もない。ブダペストの生活も強制収容所の生活も、彼にとつては継続する生活の延長でしかない。彼にとつて、強制収容所は否定されるべきものでも肯定されるべきものではなく、彼の「現実」なのである。だから、強制収容所も自らの生活、人生の一部である。

もちろん、小説からは明瞭でないが、ケルティースはアウシュヴィッツがもつ意味を普遍的に捉えることで、従来の「アウシュヴィッツ文学」との違いを際立たせている。

### 不条理の中の条理

強制収容所が不条理な存在であれば、そこにはいわば「囚人社会」の生活がある。「囚人」の自治的社会とも言える。外から見れば、強制収容所は「ゼロの存在」であり、地球上から消滅すべき存在と考えるかもしれない。しかし、強制収容所にも、時間

が流れる限り、時間を刻む人々の生活がある。朝起きて朝食をとる。コーヒーを飲んで、点呼が始まる。労働キャンプの仕事はきついかもしれないが、それよりきつい仕事がないが「普通の生活」にだってあるだろう。仕事が終わってから夕食までの時間には、「囚人たち」の交換市が開かれる。人が生きていく限り、生活の知恵が働く。タバコ一本と明朝のスープが交換される。昼飯のパンと明朝のスープが交換される。いわば素朴な先物市場が展開する。病院には「囚人」の医者がいる。看護士がいる。主任医師の回診もある。性根の良い奴も悪い奴もいる。それは「普通」の世の中と同じだ。だから、「普通」の世の中に意味はあるが、収容所の生活に意味がないとは言えない。ケルテイスにとつて、強制収容所の一年は、一〇年分にも匹敵する経験だったはずだ。けつして、無意味で「ゼロ」の生活ではなかった。

不条理な存在の中に、条理のある人間生活が営まれている。この生活を望んだわけではないが、人生はどのように展開した。それを受け入れる以外にないだろう。だから、人は皆、それぞれの立場で、それぞれの役割を果たしている。

アウシュヴィッツであれブツヘンヴァルドであれ、それが「自分」の体験した「客観」である。不条理か条理か。それは「主観」から離れた価値判断にすぎない。

### 運命と自由

何が運命で、何が自由かを簡単に決めることはできない。第二次大戦を契機に命を失ったのは「ユダヤ人」だけではない。戦時には命や生活が保証されている人はいなかった。戦いの前線に駆り出された兵士の生活や体験は、強制収容所に比べて良かったと言えるだろうか。強制収容所に入れられるのが運命なら、前線に

駆り出されるのも運命だ。ふつうの軍事捕虜にも同じ強制収容所が待っていた。とすれば、とくに「ユダヤ人の運命」を特別視する必要があるだろうか。ケルテイスは、強制収容所での「ユダヤ人殺害」は「ユダヤの悲劇」とか「ユダヤの運命」ではなく、「キリスト教社会のモラルと文化二〇〇〇年の恥辱」の凝集点だという。恥辱という意味で「ホロコースト」を使うなら、それは今も続いており、現在形で書かれるべきだと言う。

小説には映画用脚本がある

(*Sorsztársak filmforgatókönyve*, Magvető, 2001, Budapest)。三部構成の最後の場(第三部第六場)に、小説と同名の表題を付している。この場面は、主人公がブダペストの家に戻り、近所の叔父夫婦との会話から構成される。夫婦が少年に「これから人生をやり直さなくちゃね」と話しかけるのにたいし、少年は「そ

れじゃ、これまでの僕の人生はどうなるの。何もやり直すことはない、ただ今までの人生を続けるだけだ」と答える。この場面は、北朝鮮に拉致され、戻って来た人々の感情とも通じ合う。

強制収容所から戻ってきた人々にたいし、強制収容所は憎むべき存在で、「ゼロの体験」だと断罪する。同じように、北朝鮮で過ごした二四年間の生活は本当にゼロだったのだろうか。人が生きていく限り、時間が流れる限り、そこには生の営みがある。社会全体が洗脳されることはありえない。強制収容所が「囚人の自治組織」だったように、北朝鮮にも支配者の生活とは違う日常生活がある。誰がその二四年間の生活を否定することができようか。

ケルテイスであれ、北朝鮮に拉致された人々であれ、異国の生活は運命だったのだろうか。そこには自分の意志を働かせる自由はなかった

のだろうか。逆に、もし拉致されていなかったらどうだったのだろうか。幸せだったと言えるだろうか。他人が判断できることではない。ケルテイスは自らの体験を通して、それぞれの人生の意味や意義が他人によって簡単に断定されるようなものではないことを教えている。

### 「人類の恥辱」を忘れるな

スウェーデン政府は『運命の不在』をスウェーデンの高校生に無料配布することを決定した。同じ年頃の少女が自からの疑似体験として、ケルテイスの小説の世界に入り込むことを推奨したのだ。ナチの蛮行を人類の恥辱として普遍化し、ヨーロッパ大陸の統合という新しい世紀に向かって進むためにも、これを新しい社会を担う世代に伝えたいということだ。

ナチが冒した犯罪をたんにドイツ民族の問題としてでなく、人類の問

題として捉える視角には、やはりヨーロッパの文化と文明の深さが基礎になっている。そのような視角を日本社会は共有しているだろうか。恥辱を忘れる者は、再び恥辱にまみれるのではないだろうか。

## ケルティース・イムレ著 『運命の不在』

(要約版、未定稿)

ケルティースの処女作は自伝小説であり、主人公の僕 *Kerres Grady* の回想で構成される。一九四四年から一九四五年にかけて起きた個人的事件にもとづく。主人公は一五歳。それまで「人種」のことも、「宗教」のことも、考えたこともなければ、考えるきつかけもなかった。戦争も末期。ブダペストに空襲警報が鳴らされるまでに事態は進行していた。これが小説の舞台背景である（注釈）。

### 父との別れ

一九四四年のある日、父に労働キャンプへの召集が来る。僕は学校を

早引きして、父の仕事場（店）で待ち合わせる。そこから父がキャンプへ持参する荷物の買出しをした。家に戻り、父は商売の資産を知人の実業家シュトウーに引渡す。シュトウーは引き取り資産の一覧表を作成し、契約文書を交わそうとするが、父は必要ないという。そういう文書が残るのも災いをもたらしかねないし、仮にそのような文書をもらっても、世の中には確実なものはないもなしから、文書には価値がないという。シュトウーは継母と僕の生活を守るから、安心して欲しいという。夕方からは親戚一同が会するお別れの夕食となる。ユダヤのお祈りがなされるが、僕には良く分からない。叔父が別室に僕を呼び、事の顛末を教え、一緒に祈るように誘うが、やっぱり良く分からない。ただ、もう父とは離れ離れになる。もう会えないかもしれない。これからは継母と一緒に過ごしていかなければならな

い、という感情が次第に心を占める。実母は引越して来いというが、継母と過ごした生活があり、父もまた継母の面倒を見るように言い残し、そもそも裁判所が父を僕の扶養者に決めたのだから、継母と生活するのが自然のような気がする。

僕たちが外出する時には、常に黄色いリボンを付けなければならぬ。父が発発してから、僕はチェベルの軍需工場で働くことになった。黄色いリボンで市外へ出ることは禁じられていたが、軍需工場の特別な身分証明書があるから安心して出かける。会社には僕と同じような少年、そう僕と同じ「人種」の一五歳前後の少年たちが働きに來ている。

### チェベルの出来事

一九四四年の夏、いつもの通り、バスに乗って仕事に出かけた。チェベルの入りで急にバスが止まった。警官が一人入ってきて、「ユダヤ人



は降りる」という。はて、僕には特別の証明書があるから、何かの間違いだらうと思うが、僕たち仲間を下ろして、バスを追いやった。僕は特別証明書を見せるが、警官は関知しない。何かの誤解だらうと思いたが、次々にバスから召集される友人たちを待ち、ラッシュが過ぎたところで、皆で税関の空事務所へ徒歩で進む。いろいろ警官に質問するが、彼には権限がないから何も知らない。上司と連絡をとろうとしているが、なかなか打ち合わせが出来ないようだ。

そうこうしているうちにお昼になり、午後も遅くなる。ようやく出発の打ち合わせができたようで、次の目標に向かって徒歩で進む。どこへ行くのか、ただ歩くだけだが、しばらくしてレンガ工場の入り口に来る。工場の入り口には警官ではなく、兵隊が立っている。威厳のある将校がやってきて、「検査は明日だ」。それ

まで、「このユダヤの奴等を馬小屋に留め置き」と命令する。いったい僕等に期待されているのはどんな役割なのか、さっぱり分からない。継母は夕食を作って待っているだろうに、連絡をとりようもない。

もう僕らは列車の中にいる。喉が渇くが水はない。レンガ工場の「検査」で聞かれたことは、結局のところ、ドイツに働きに行く気があるかどうかだった。遅かれ早かれいずれそうなるということだから、レンガ工場に集められた皆は提案を歓迎した。どこへ向かうのか何も知らされないが、三日三晩雑居の貨車に揺られた。空腹と渇き、女性も混在するなかの貨車の情景は、これまで体験したことのない経験だった。

### アウシュヴィッツ

どこに着いたのか分からない。やがてそこがアウシュヴィッツだと分かる。膨大な敷地にバラックが並ん

でいる。その通りを進むうち、蛇口を見つめる。とにかく喉が渴いている。「nicht trinken」とあるが、飲んでも良いかという質問に、案内の兵隊は無言でうなずく。医師の検査があり、そこから浴室でシャワーを浴びると説明される。何百人も一緒だが、一人の検査はほんの数秒。それでも、長い列の後ろにいる者は二分も待たなければならぬ。着衣を脱ぎ、すべての装飾品を外し、浴場への行列に並ぶ。遠く向こうの列には女性や老人たちが並ぶ。

シャワーをかぶった後で、髪が刈られて丸坊主になった。囚人服を着て、夕食を待つ。スリーブが到着して、味見をするがとても食えない。横から兵隊上がりが口を出す。まずいものでも、そのうち慣れるさ。生きていくためには食わなきゃならない。今まで気が付かなかったが、さっきから何か変な臭い匂いが漂ってくる。この匂いには覚えがある。そう、チ

エペルの皮革工場のそれだ。どこから来るのだろう。見上げるともくもくと煙を上げている煙突がある。ありやひよつとして火葬場か。それだけ伝染病が流行っているのか、いやに消毒剤を丹念に掛けられた。あの水も汚染されているのかもしれない。それにしても、伝染病で死ぬ者がそれほど多いという訳か。いや待てよ。あれはもしかして、向こうに並ばされていた老人、女子供の焼却炉か。後から勘定してみると、不思議なことだが、アウシュヴィッツにいたのはたつたの三日。四日目の夕方にもう列車、そうあの貨車に乗っていた。ブツヘンヴァルドが目的地だとは知らされたが、今度ばかりは身構えた。三日の道中を経て、ブツヘンヴァルドの朝に到着した。

## ブツヘンヴァルド

アウシュヴィッツに比べ、田舎だが、生活の臭いがするプラットフォ

ームだ。ただ、囚人たちでなく、ここでは兵士が貨車を開けた。そこからは、まるで定規で測ったように事が進行する。本当に規律だつて動く兵士に驚いた。殺風景なアウシュヴィッツに比べ、「ぶなの森」を意味するブツヘンヴァルドにはまるで別世界が広がっている。収容所の廻りは緑に溢れ、小奇麗な建物が並んでいる。木々の合間から見える遠くには瀟洒な住宅も見える。アウシュヴィッツに比べて、よほど親近感を覚える。ここでは役割を与えられた囚人たちもよほど親切に振舞っている。昔からの住人がリボンなどの必要携帯品の世話をしてくれる。黄色の三角形のリボンに「C」、つまりハンガリー人を示す文字が入る。帯には僕の番号64921番が記されている。

ここでは朝から熱いスープが出る。パンも三分の一。アウシュヴィッツのように、気まぐれに、日によって四分の一、五分の一というのは違

う。昼には具沢山のスープがだされ、肉切れも入っている。幸運な時には小片がある。これがいわゆる我々の用語でNunage（おまけ）と呼ばれる奴だ。もちろんブツヘンヴァルドにも焼却炉があった。しかし、たつたの一つだけだ。アウシュヴィッツと目的が違い、こう言い切っては語弊はあるが、収容所の仕事でどうにも使い様がなくなった者だけを焼くのだろうか。

ここでは、収容所を隔てる鉄線には電気が通っていないが、夜中にテントから出れば犬が追いかける仕組みにはなっている。夕方になると、囚人たちの交換市が開かれる。衣服、パン切れ、缶詰などが交換されるのだ。明日のスープやパンの交換も行われる。

物知りによれば、この収容所が開かれてから七年という。それ以前に収容された囚人たちもここにいる。こういうのも変だが、ワイマールの

町に近いこのブツヘンヴァルドがすぐ  
に気に入った。

## ツアイツ・キャンプ

ブツヘンヴァルドの収容所から北  
に徒歩で二〇分ほど行ったところに  
ツアイツ収容所がある。そこが最終  
的な落ち着き場になった。残念なこ  
とに、ブダペストからの道中で知り  
合った友人たちと離れ離れになる。  
ここには焼却場もあのシャワー室も  
ない。そういうものが足りない収  
容所なのだ。

整列点呼が始まり、廻りを見渡す  
が、知り合いはいない。僕を見てい  
る男がいる。尋ねるとブダペスト出  
身だという。僕の経緯を話して、そ  
れから彼の経緯をと思った瞬間、思  
い切り顔を殴られた。黒服に固め  
た男が、「Ruhe」と叫びながら、  
倒れた僕の顔を踏みつけていた。  
また別の集団に向かったところで起  
き上がった。廻りの連中が気を遣っ

てくれた。その中の一人が、ツイト  
ロン・バンディだった。ウクライナ  
の労働キャンプからアウシュヴィッツ  
ツを経て、ここに来たのだ。二四歳  
のがつちりした体格の男だ。ブダペ  
スト出身のホルマン叔父さんはドイ  
ツ語がよくでき、通訳的な仕事もし  
ていた。ホルマン叔父さんの説明に  
よると、あの黒服の連中は刑務所か  
ら送られた凶悪犯たちで、こうやつ  
て収容所の規律監視(Lagermeister)  
の仕事をしているという。連中はユ  
ダヤ人でなく、ただの犯罪人で、緑  
のリボンの「N」が目印だという。  
ツイトロン・バンディと始まった  
ツアイツ生活は苦にならなかつた。  
点呼と仕事を抜かりなくやっていれ  
ば、「ここでの生活も悪くはなかつた。  
バンディとも話したが、これがツア  
イツでの我々の黄金時代だった。

## 苛立ちと入院

秋が過ぎ、冬が近づくとつれ、倦怠

感と苛立ちが募るようになった。雨  
と寒さの中、セメント袋を運ぶ仕事  
があった。セメントが袋からこぼ  
れることに無頓着で進んだところで、  
監視の民兵が駆け寄ってきた。「こ  
の馬鹿野郎。貴重なセメントをこぼ  
しやがって」とぶん殴り、顔を泥に  
落ちたセメントに押し付けた。

とにかく、僕は寒さと空腹、倦怠  
と苛立ちで、ほとんど力を失いかけ  
ていた。そんな日々を送る中、膝の  
痛みが日に日に強くなり、一人で歩  
けなくなった。膝の傷が膿んで、蜂  
窩炎になっていた。バンディがキャ  
ンプの病院に連れて行ってくれた。  
ここから僕の病院生活が始まった。  
「U」のマークを付けたハンガリー  
の医師が「F」のマークを付けたフ  
ランスの医科長と話をつけてくれた。  
麻酔のない、汚れたシートで覆った  
手術台で、膿を出す切開手術が行わ  
れた。病院の助手、つまり看護士は  
「P」(Priegel)を付けている。もち

ろん、医師も看護士も収容所の囚人だが、専門職で生きている。看護士はてきぱき仕事をこなし、患者にやさしい。厳しい冬の最中、こうやって病院バラックのベッドに入れるのは幸運といふべきだろう。隣のベッドには今にも死にそうなハンガリー人がいた。

ある日、どこかかと看護士が現れ、隣のベッドの患者を抱えて、移動の台車箱に乗せようとした。患者はか細い声で「抗議する」と叫ぶ。「何だと。お前はまだ生きていたいのか」(Was? Du willst noch leben?)。すでに何体かが乗せられている移動箱に乗せられた。「まだ生きていたいのか」。強制収容所でこの言葉の意味することは自明だ。やっぱりここにも、アウシュヴィッツと同じ仕組みが働いているのか。

その途端に、僕の目の前にも手が伸びてきた。有無を言わず、僕もその台車に乗せられた。「ああ、これ

が最後か」。そう思うと、土の色も、遠くの風景も、いとおいしい。台車はブツヘンヴァルドへ向かった。収容所のバラックの間から、夕食のスープのが匂う。「人参スープだ」。ガス室に送られるのか、それとも別のやり方があるのか。できるなら、僕がそれを決めたい。でも、許されるなら、もう少しだけ、この収容所で生きていたい。

### 奇跡

シャワー室に運ばれた。いよいよガスで始末されるのか。ところが、勢いよく噴出してきたのは温水だ。信じられないことが始まった。こんなに暖かいお湯、それもこんなに勢いのある温水に出会ったのは初めてだ。シャワーが終わると、看護士が体を拭いてくれ、新しい服にが与えられた。

何だか狐につままれたようだ。病室バラックも、ベッドが一つずつ並

べられ、整然としている。医師も看護士も、テキパキと仕事をしていて、まるで自治組織のシステムが機能しているようだ。それにしてもおかしい。これには何か隠された意図があるのではないか。ハンガリー語で隣の患者に問い掛けて見る。反応はない。何度か繰り返し返すと、か弱い返事が戻ってきた。僕が尋ねる。「ここでは飯がでるのか」。「でない」という。やっぱりそうか。よく観察して見ると、バラックの隅々には拡声器が取り付けられているが、もしかして我々の会話が盗聴されているのではないか。疑心が広がる。その途端に部屋の外から大きな声がかかる。「Saal sech's! Essenholen!」。看護士が食事をとりに行く。間もなく部屋全体にスープの香りが漂った。疑心は杞憂に終わった。

このブツヘンヴァルドの病院は不思議なほど良く機能している。看護士がカルテに記入しようと名前を聞

く。「64921番です」。「いや、君の名前だ」。収容所は名前のないところだが、初めて名前を聞かれた。そのポーランド人の看護士は「Kerwischfjerd」と書く。同じでは医師の巡回もある。毎朝、「Guten Morgen」と主任医師が回ってくる。看護士を振り返り、「二三のことを確認する」と「Kewisch .... Was? Kerwischfjerd!」と読む。気の利いた返事をして、僕の存在を認めてもらう術も心得た。

部屋の拡声器を通して聞かれる各種の命令は、毎日、定刻どおりだ。たとえば、最初の頃、「Eia zwo, Eia zwo, aufmarschieren lassen!」という召集連絡が耳についた。もちろん、Zwoはzweiだが、EiaはL.A.、つまりLägeraltesterの略なのだ。収容所の監視役にも二通りあるということか。収容番号がもう九万を超していることを考えれば、当然か。やがて空襲警報が鳴り出す頃には、

「Krematorium ausmachen!」という命令で度々目を覚まされた。その一分後に同じ命令が繰り返されるが、今度は「Khematorium! Sofort ausmach'n!」と、苛立った声になる。ほんの少しの種火でも、襲来する飛行機に見せたくないというのだ。次第に聞かれるようになったのは、「Alle Juden im Lager sofort antreten!」だ。やはり苛立った声で、「Lägeraltester! Aufmarschieren lassen! Lägeraltester! Wo sind die Juden?」という命令も聞かれるようになった。

はつきり言えることは、最後まで台所は規則どおりに機能していたし、医師の巡回も定刻どおりだった。ある朝、「モーニング・タイムが済んだ後、どたばた走る音が聞こえ、大きな叫び声が聞こえる。我々の看護士も急いで荷物をまとめ、どこかに立ち去った。九時頃だったか、「An alle SS-Angehorigen」と二度繰り返した

後、「Das Lager sofort zu verlassen」と、兵士への命令が下った。午後も四時頃か、このLägeraltester、そのあの看護士の声が拡声器を通して聞こえてきた。「Kameraden」と少ししゃくったような、しかし鮮明な声でこう言ったのだ。「Wir sind frei」。ここにあの看護士がいるということは、あの医師の先生も同じ感慨での放送を聞いているのだと思った。この同じ放送がいろいろな言語で響き渡った。

台所の調理場担当だった連中に台所の占拠を頼み、収容所の皆にグヤーシュ・スープを作ろうということになった。僕もようやく、自分自由になったという気持ちになった。

### ブダベストへの帰還

アメリカの占領地の境界までアメリカ軍のトラックで、その後はソ連軍の領内を通過し、ドレスデンからプラチスラバまで列車で移動した。

ブラチスラバの駅に降りた途端、多くの人に囲まれた。「強制収容所から戻つて来たのか。こういう名前の男と会つたことがないか、こんな風貌だが」と、縁者や関係者が僕らを取り囲んで矢継ぎ早の質問をする。収容所では名前がないから、名前を言われても分からないし、収容所生活で顔つきも変つているから、答え様がない。「ガス室を見たか」という質問もあった。「それについては今話したくない」と言うと、「そんなことを言わないで。ガス釜があつたかどうかだけ言つてよ」と言う。「もちろんガス室はあるよ。どの収容所にも。アウシュヴィッツでも確認したが、僕はブツヘンヴァルドから戻つたんだ」。「ちよつと待つて。ということは、君はガス室について聞いたことがある」。「もちろんです」。「でも、自分の目で確認した訳ではない」。「そうです」。列車が発発するので、急いで飛び乗つた。

ブダペストの西駅に到着した。すぐにバンデイの家に向かつた。ドアをノックすると、扉を少しだけ開けた娘がいた。顔つきから妹だろう。「まだブダペストに戻つていない」という。僕はそこから電車に乗つた。途中で検札が来て、切符を見せるといふ。無いなら買うか、すぐに降りろといふ。このやり取りを見ていた一人の紳士が、検札を叱りながら切符を渡す。「君はドイツから戻つてきたのか。強制収容所からか」。「もちろんです」。「どこの収容所だ」。「ブツヘンヴァルドです」。「ナチの地獄の一つだ。いつたいどこからかつ攫われたんだ」。「ブダペストから」。「どれほどいたの」。「一年です」。「みんな見てきたんだらうな、坊や。恐ろしいことを。でも、肝心なことは、もう終わつたということだ」。「再びここに戻つてきて何を感じるかというから、憎しみです」と答えた。「時と場所によつて、憎しみに

も役割があるし、利点もある。だが誰にたいして憎しみを覚えるのかね」。「皆にたいしてです」。少し時間を置いて、「たくさんの悲惨なことに直面しなければならなかつたのだね」。「何を悲惨といふかによります」。「そりやそうだが。さぞかしお腹がすいたり、殴られたりもしたんだらう」。「当然です」。「どうしてそんな風に言うんだ」。「だって、強制収容所なら、それが当たり前でしょう」。「それはそうだが。しかし、……しかし強制収容所は当たり前のことではないからね」。互いに違ふことを議論しても仕方が無いと思つたので、答えなかつた。彼もまた、分かつていない奴、つまり子供と議論しても仕方が無いという顔つきであつた。電車を降りようとすると、その紳士も一緒に降りてくる。「こうしたことかどうしてまたどのようにして起きたのか、世界はまだ分からずにいる。君の経験を書いてみるつもり

はないかね。僕にたいしてではなく、世界にたいして。」「でも、何についてですか。」「収容所の地獄だよ。僕はこれに答えることができなかった。地獄は知らないし、考えてみたことも無いからだ。」「収容所を地獄と考えるのが間違っているかい。」「僕が知っているのは強制収容所です。それについては知っているけれど、地獄は知らない。」「そうは言うが。」「それなら、飽きることの無い場所なら考えることができます。強制収容所がそれで、条件によってはアウシュヴィッツもそうです。」「で、それをどうやって説明できるの。」「時間です。」「どうやって。」「時間が助けてくれるんです。」「助けてくれる。何を。」「すべてをです。」「

**運命の不在**  
家に辿り着いた。ノックをすると、見知らぬ女が少しだけドアを開ける。「どなたをお探して」というから、「この住人です」と答える。閉めようとするから、足をドアに挟む。「何かの間違いでしょう」という。家の番号を確認しようとしたところ、ドアから離れて上を見上げた瞬間に、ドアを閉められた。  
仕方なく階段近くまで戻り、フライシュマン叔父さんのドアを叩く。居間に招かれ、話し始める。「父の消息は?」。少し時間をおいて、叔父さんは手を高く掲げ、それから「訃報だよ。残念ながら、間違いない」という。「同僚の目撃だよ。苦痛は短かったそうだ。」「ドイツの収容所だ。そう実際にはオーストリアの領地の、あの、:。そう、マツヘンハウゼン、そうマツヘンハウゼンだ。」「それから母の消息を尋ねた。元気

うしていますか」と興味を示すと、「あー、もう嫁に行ったよ」という。「で、誰のところへ。」「良く知らないが、コヴァーチとか何とか言う。いや、コヴァーチでなくて、フトー。」「シウトウーじゃないの。」「そうそう、シウトウーだ。いろいろ世話になったと言っていたから。」「僕はソファーを動かして、ポルドー色の生地をなでた。」「叔母さん。僕がここに最後に座った日のことを覚えていますか」と唐突に聞く。「アウシュヴィッツへは、バスで行くのか、それとも列車で行くのか議論していた時ですよ」と僕は少しはにかんだ。  
「君の道程が、ここから一直線に収容所の地獄に続いていなたんね、分かりやしなかつたよ。僕は静かに、収容所は地獄じゃない」と言う。「何だつて。わしや地獄しか思い浮かばないよ。」「僕は地獄なんて考えたこともないよ。」「どこが違うの」

と叔母さんが中に入る。「つまり、地獄はないが、収容所はあるってこと」。「あつた」、てことでしよう。幸運にも、もう終わったことだから」と僕の頭をなでた。

「これからどうするかを考えなくっちゃね」。「どうするって?」。「まず、あの恐ろしいことを忘れることだ」、と叔父さんが言う。「どうして?」。「どうしてって、生きるためだ。自由に生きるためだ。あんな負担を背負って新しい人生を始められるわけがない」。「じゃ、僕の昔の生活はどうなるの。それをどうすれば良いの。あれだって、僕の人生の一部だった...」。「それが終わったんだよ。あの時は、僕らには別の運命が待っていたんだ」。

僕は頑固に言い張った。「でも、僕はその運命も受け入れたんだ」。「それは誰もが受け入れたんだ」、と叔父さんが言う。「別の選択肢はなかったんだ。だが、今は自由になったん

だ」。「あの時だって自由だった」と僕は抗弁した。いつも時間があつた。関税事務所ではまる一日過ごした。アウシュヴィッツでは医師の検査のために、少なくとも三〇分は待った。どこでも、どの時間でも、別のことが起きて不思議じゃなかった。アウシュヴィッツでも、ここでも。父と別れる時もそうだった。

「じゃ、何ができたと言うのだね」。「もう十分だよ」と叔母さんが間に入った。「ジュルカ。おまえはくたびれている。長い旅立ったからね。休まなくっちゃいけないよ。お母さんだって待っている。すぐ行っておやり」。

何も大げさに言うことはない。生きなきゃいけないことはよく分かっている。継続できないような僕の人生を続けるだけだ。はつきりしていることは、生きていけないような無能力なんてありはしない。僕は分かっている。僕の行く手には避け

ようのない落とし穴や、歓喜が待っている。あの焼却炉がある所にだつて、苦痛の合間には歓喜に似たものがあつた。皆は悲惨なことばかりを聞きたがるが、僕にとっては忘れることの出来ない経験として残っている。そう、今度聞かれた時は、強制収容所の歓喜について話す必要がある。同じ事を聞かれれば、僕だって忘れることもないだろう。

・ 完 ・

#### 編集室より

次号の締め切りは、三月下旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 356-5721

e-mail: nihonjinkai@axelero.hu

電話・FAXが変わりましたので、「」注意ください。